第２部

平成25年度　外部評価報告書

１．外部評価委員会委員名簿

役　職　名	氏　名
第１号委員 鹿児島大学大学院理工学研究科建築学専攻　教授 鹿児島大学学長補佐　キャンパス計画担当 鹿児島大学工学部　副学部長	本　間　俊　雄
第２号委員 霧島市教育委員会教育長	髙　田　肥　文
第２号委員 霧島市中学校校長会　会長 霧島市立隼人中学校　校長	肥　田　正　和
第２号委員 鹿児島市中学校校長会　会長 鹿児島市立甲南中学校　校長	中　西　昭　郎
第３号委員 鹿児島県工業技術センター所長	永　吉　弘　己
第４号委員 錦江湾テクノパーククラブ会長	宮　村　憲　一
第５号委員 株式会社南日本新聞社　霧島総局長	中　島　裕二郎
第６号委員 消費生活アドバイザー	石　窪　奈穂美
第６号委員 株式会社相良製作所　代表取締役社長 鹿児島高専同窓会長機械工学科１期生	相　良　正　典

２．外部評価委員会出席者名簿

外部評価委員出席者

役　職　名	氏　名
第１号委員 鹿児島大学大学院理工学研究科建築学専攻　教授 鹿児島大学学長補佐　キャンパス計画担当 鹿児島大学工学部　副学部長	本　間　俊　雄
第２号委員 霧島市教育委員会教育長	髙　田　肥　文
第２号委員 霧島市中学校校長会　会長 霧島市立隼人中学校　校長	肥　田　正　和
第２号委員 鹿児島市中学校校長会　会長 鹿児島市立甲南中学校　校長	中　西　昭　郎
第３号委員 鹿児島県工業技術センター所長	永　吉　弘　己
第４号委員 錦江湾テクノパーククラブ会長	宮　村　憲　一
第５号委員 株式会社南日本新聞社　霧島総局長	中　島　裕二郎
第６号委員 消費生活アドバイザー	石　窪　奈穂美
第６号委員 株式会社相良製作所　代表取締役社長 鹿児島高専同窓会長機械工学科１期生	相　良　正　典

鹿児島工業高等専門学校出席者

役　職　名		氏　名
校　　長		赤　坂　　裕
【副校長】教務主事	教務委員会委員長	芝　　浩二郎
学生主事	学生委員会委員長	白　坂　　繁
寮務主事	寮務委員会委員長	堤　　隆
専攻科長	専攻科委員会委員長	堂　込　一　秀
地域共同テクノセンター長	地域共同テクノセンター運営委員会委員長、研究・知財委員会委員長	宮　田　千加良
校長特別補佐（総務・企画担当）	自己点検・評価委員会委員長	原　田　治　行
校長特別補佐（国際交流・留学生担当）	国際交流委員会委員長	椎　　保　幸
図書館長　兼　一般教育科文系科長	図書館運営委員会委員長	鮫　島　俊　秀
情報教育システムセンター長	情報教育システム委員会委員長	入　江　智　和
学生何でも相談室長		松　田　信　彦
広報委員長	広報委員会委員長	大　竹　孝　明
ＦＤ委員長	ＦＤ委員会委員長	井　手　輝　二
一般教育科理系科長		篠　原　　学
機械工学科長		塚　本　公　秀
電気電子工学科長		楠　原　良　人
電子制御工学科長		室　屋　光　宏
情報工学科長		幸　田　　晃
都市環境デザイン工学科長（代理）		内　田　一　平
事務部長		大　島　英　夫
総務課長		今　村　文　昭
学生課長		永　松　　巌
技術長		山　下　俊　一

３．平成25年度鹿児島工業高等専門学校外部評価実施要領

１．趣旨

鹿児島工業高等専門学校の自己点検・評価について、外部の有識者により本校の教育・研究活動等の評価、助言を受ける。

２．評価方法

外部評価は、鹿児島工業高等専門学校の自己点検・評価報告書等に基づき、教育・研究活動等について行う。

委員会終了後、各委員に外部評価結果について、報告書の提出を依頼する。

３．外部評価委員

(1) 本間　俊雄　　鹿児島大学大学院理工学研究科建築学専攻　教授
　　鹿児島大学学長補佐　キャンパス計画担当
　　鹿児島大学工学部　副学部長
(2) 髙田　肥文　　霧島市教育委員会教育長
(3) 肥田　正和　　霧島市中学校校長会　会長
　　霧島市立隼人中学校　校長
(4) 中西　昭郎　　鹿児島市中学校校長会　会長
　　鹿児島市立甲南中学校　校長
(5) 永吉　弘己　　鹿児島県工業技術センター所長
(6) 宮村　憲一　　錦江湾テクノパーククラブ会長
(7) 中島　裕二郎　株式会社南日本新聞社　霧島総局長
(8) 石窪　奈穂美　消費生活アドバイザー
(9) 相良　正典　　株式会社相良製作所　代表取締役社長
　　鹿児島高専同窓会長機械工学科１期生

４．外部評価日時

平成26年１月22日(水)　　13：15～17：00
鹿児島工業高等専門学校　地域共同テクノセンター２階　共同研究・受託研究室

５．事前配付資料

(1) 平成25年度自己点検・評価報告書（平成22年度～平成24年度）
(2) 独立行政法人国立高等専門学校機構中期目標
(3) 平成22年度　外部評価委員からの提言及び指摘事項に対する回答及び今後の対応
(4) 平成25年度　学校要覧

６．日程

(1) 開会
(2) 校長挨拶
(3) 委員及び本校出席者の紹介
(4) 委員長選出
(5) 学校概要・特色及び平成25年度　自己点検・評価報告書の説明
(6) 施設見学
(7) 質疑応答
(8) 外部評価委員打合せ
(9) 講評及び閉会

４．平成25年度外部評価委員会日程表

１．日　時　　平成26年１月22日（水）
13：15～17：00

２．場　所　　鹿児島工業高等専門学校　地域共同テクノセンター２階
共同研究・受託研究室

３．会次第

(1) 13：15～14：50

① 開　会
② 校長挨拶（５分）
③ 委員及び本校出席者の紹介
④ 委員長選出
⑤ 学校概要・特色及び平成25年度　自己点検・評価報告書の説明（30分）
学校概要・特色
：教務主事（25分：ＤＶＤ及びパワーポイント）
平成25年度　自己点検・評価報告書の説明
：総務・企画担当校長特別補佐（５分）
⑥ 施設見学（45分）

【14：50～15：00　　休憩】

(2) 15：00～17：00

⑦ 質疑応答（70分）
⑧ 外部評価委員打合せ（40分）
⑨ 講評及び閉会（10分）

５．外部評価委員会規則

（設置）

第１条　鹿児島工業高等専門学校（以下「本校」という。）に外部評価委員会（以下「委員会」という。）を置く。

（目的）

第２条　委員会は、本校が行った自己点検・評価結果等について検証を行い、本校の教育・研究等の改善に資することを目的とする。

（組織）

第３条　委員会は、人格識見が高く、かつ、本校の発展に理解ある次の各号に掲げる学外者の中から、校長が委嘱した若干名の委員をもって組織する。

(1) 大学、高等専門学校等の高等教育機関の教員及び経験者等
(2) 本校の所在する地域の教育関係者
(3) 地方自治体等研究機関の研究者等
(4) 産業界の有識者
(5) 報道機関の有識者
(6) その他校長が必要と認める者

（委員の委嘱）

第４条　委員の委嘱は、外部評価委員会の開催に合わせて、必要な期間行うものとする。

（委員長）

第５条　委員会に委員長を置き、委員の互選により選出する。

２　委員長は委員会を召集し、その議長となる。

（報告書と公開）

第６条　外部評価を行ったときは、報告書を作成し、公開するものとする。

（運営）

第７条　委員会の運営については自己点検・評価委員会が行う。

附　則

１　この規則は、平成16年５月21日から施行する。

２　この規則施行後、最初に第３条に規定する委員となる者の任期は、第５条の規定にかかわらず、平成18年３月31日までとする。

３　鹿児島工業高等専門学校と有識者との懇談会要項は、廃止する。

附　則

この規則は、平成22年４月１日から施行する。

６．外部評価委員会議事録（一部要約）

【開会　校長あいさつ】

皆様こんにちは。本日はお忙しいところ、鹿児島高専の外部評価委員会にご出席ただき、ありがとうございます。

まず、本日の委員会の進め方について説明させていただきます。質疑応答の時間に制約がありますので、委員の皆様には、事前にいただいた意見の中から特に発言したい点をピックアップしてお話しいただくことになると思います。また、あらかじめご意見等を出していない委員の皆様からも、本日ご質問、ご提言等をいただければと思います。事前にいただいたご意見や改善を要する点を含め、後から作成する外部評価報告書の中で学校としての回答をし、委員の皆様に見ていただくことにしたいと思います。

本日は、学内の視察もしていただくことを予定しております。短い時間ですが、どうかよろしくお願いします。本日の外部評価委員会とも関係がありまので、鹿児島高専が受けている外部評価の全体像について、簡単に説明したいと思います。

鹿児島高専は、平成16年度より、国立高等専門学校機構（以下「高専機構」という。）という独立行政法人のもとに置かれました。全国51ある国立高専のうちの一つです。国立高専は、その運営の約80％を国庫（税金）によっています。したがって、国民の皆さんに業務の遂行状況を説明する責任があり、そのため、幾つかの外部機関による評価を受けています。

本校が受けている外部評価として、まず、機関別認証評価があります。これは、大学評価・学位授与機構という独立行政法人が担当しています。７年に１回の評価で、本校は平成18年度に第１回を受けました。第２回は１年前倒しで平成24年に受審しました。この審査は書面審査と現地での実地審査により行われます。書面審査のために提出した書類は864ページに及ぶ大部の資料となりました。

次に認定専攻科の審査があります。これも大学評価・学位授与機構の審査です。本校の本科４，５年と専攻科２年を併せた４年は、大学学部の４年に相当します。この４年間の学習成果がある水準を満たせば、専攻科修了時に学士の学位が授与されます。ただし、高専には学士の学位授与権がないので、学位審査は大学評価・学位授与機構が行います。学位授与機構は、個別の学位審査の他、専攻科の審査も行います。この審査は７年に一回で、本校は平成24年度に受審しました。

本校は、日本技術者教育認定機構（JABEE）のプログラム認定を受けています。JABEE は、申請されたプログラムが一定の水準を満たすこと認定します。JABEE はワシントン・アコードという国際的な技術者教育認定制度に加盟していることから、JABEE の認定プログラムの終了証は、卒業生が海外で仕事をする場合にも有効です。この審査は６年に一回で、平成26年度に受審します。

高専機構は、５年毎に中期目標、中期計画を作成し、毎年、年度計画を作成しています。

各高専は、高専機構の年度計画に対応した年度計画を、毎年高専機構に提出します。提出した年度計画に対する実績報告書も毎年求められます。各高専が高専機構に提出する年度計画は、網羅的でなく高専機構の年度計画に応じた特徴的なものです。高専機構は各高専の年度計画と実績の報告に基づいて、各学校を評価したり注文を付けたり、文部科学省に提出する報告書を作成したりしています。

このように、高専の現場は多くのデータの提出、評価、PDCA スパイラルへの活用を行わなければなりません。

さて今回の外部評価委員会の進め方について、学内で打合せを行いました。３年前の前回の外部評価委員会では、機関別認証評価と同じフォーマットで外部評価委員会資料を作成したため、大部の資料となりました。評価する委員の皆様も大変だったと思いますし、作成する学校側も相当な労力を要しました。そこで、今回は、資料はできるだけ簡潔なものとし、委員の皆様が地元の方々であるという特色を生かした審査がよいのではないかと考えました。地元の代表としての思いや提言などを、自由に語っていただくのが良いのではないかと考えました。

今回の外部評価委員会の資料として、あらかじめ委員の皆様にご覧いただいたものは、高専機構に提出している過去３年間の年度計画とその実績を要約したものです。色々なことが網羅的に書いてはありますが、体系的な評価資料とはいえません。そのため、脈絡がわかりにくく、評価しにくいという印象を持たれた委員の方もいらっしゃいました。趣旨の説明が不足しており、ご迷惑をおかけしました。はじめに申しましたように、配付資料に係らず、事前にいただいていなくてもよいので、ご質問、ご提言、コメント等をご自由にお願いいたします。また、今後の外部評価委員会のあり方についてもご意見等があれば、今後の参考とさせていただきます。

以上、よろしくお願いします。

～鹿児島高専の学校概要・特色の説明～

【芝副校長】

芝副校長から、鹿児島高専の学校概要・特色について、鹿児島高専学校紹介ＤＶＤ視聴後、以下のパワーポイントの資料により説明がなされた。

①本校正門

鹿児島高専の教育目標

養成すべき人材像として以下の学習・教育到達目標を掲げています。

1. 人類の未来と自然との共存をデザインする技術者
2. グローバルに活躍する技術者
3. 創造力豊かな開発型技術者
4. 相手の立場に立ってものを考える技術者

④鹿児島高専の教育目標

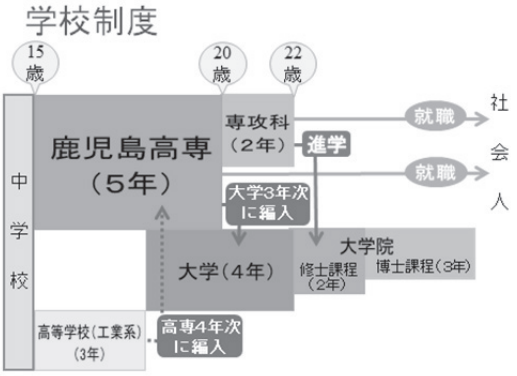
②鹿児島県（離島を除く）の主な市町

入学者の受け入れ方針（アドミッションポリシー）

本校の学習・教育目標に共感し、この目標達成にふさわしい素質と能力のある人を受け入れます。特に次のような人を求めています。

① 論理的な思考ができる人
② もの作りが好きな人
③ プレゼンテーション能力のある人
④ 21世紀の世界を支える技術者として、大いに活躍したいという夢のある人

⑤入学者の受入方針



③学校制度

入試統計

平成25年4月現在

	学科名	入学定員	志願者数	志願倍率	入学者数	入学者平均点
本科	機械工学科	40	69(2)	1.7	42(1)	368.9
	電気電子工学科	40	60(4)	1.5	41(3)	376.1
	電子制御工学科	40	64(2)	1.6	42(2)	381.1
	情報工学科	40	68(16)	1.7	40(7)	401.1
	都市環境デザイン工学科	40	77(15)	1.9	40(10)	360.2
	合　計	200	338(39)	1.7	205(23)	377.5

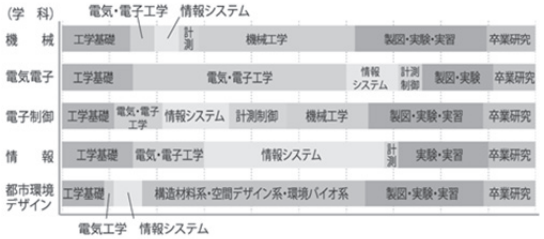
※志願者数は、第一志望の人数（推薦入試の志願者も含む）
※（　）は女子で内数
※入学者平均点は、600点満点での点数（数学は200点満点で計算）

⑥入試統計

カリキュラム

各学科の専門科目は、全学科共通の応用数学のような工学基礎、各学科独自の専門科目、さらにコンピュータ関連科目から構成されています。さらに、大学と同じように5年生で1年間、卒業研究に取り組みます。

各学科の専門科目

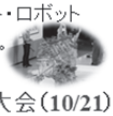


⑦カリキュラム

高専ロボコン2012（全国大会）

（アイデア対決ロボットコンテスト）

2012年の競技課題は、「ベスト・ペット」。ペット・ロボットが、高専生と協力して玉入れをする競技です。



2012年度 実績

- 全国大会（11/25）出場（Bチーム）
- 九州沖縄地区大会（10/21）技術賞・特別賞（Bチーム）

（2012年 全国大会の様子）

2011年度 実績

全国大会 ベスト8（Aチーム）

九州沖縄地区大会
優勝（Aチーム）
準優勝（Bチーム）

⑩高専ロボコン 2012

学生寮

寮生数　　平成25年4月1日現在

	1年	2年	3年	4年	5年	専攻科	計
男	182	131	108	73	35	1	530
女	18	14	9	1	3	0	45
計	200	145	117	74	38	1	575

日課	日課時間表
起床	◎7:00
点呼・体操	◎7:10～7:20
清掃	7:20～7:40
朝食	◎7:20～◎8:20
登校開寮	◎8:30
昼食	◎11:55～◎12:55 ※試験の時は 12:35～13:30
開寮	15:00
入浴	◎16:30～19:50
夕食	◎17:30～19:00
点呼	◎19:55
自習	◎20:00～23:00 ※◎21:20～◎22:00 は休憩を含めた行為も可
点呼	◎23:00
消灯	24:00

◎はチャイム

⑧学生寮

本科卒業後の進路（H24年度）

卒業生数　189 名

就職者数 132 名（69.8％）

求人倍率：15.3倍

進学者数 55 名（29.1％）

※進学者数は、短大・専門学校への進学者は除く

主な進学先：
鹿児島高専専攻科
国立大学工学部（3年次編入）

その他　2 名（1％）

大学・高専専攻科進学先（H24年度）	進学数
鹿児島高専（専攻科）	27
九州工業大学	12
熊本大学	6
豊橋技術科学大学	2
長岡技術科学大学	2
宮崎大学	2
西九州大学	1
千葉大学	1
東京工業大学	1
鹿児島大学	1

⑪本科卒業後の進路（平成 24 年度）

部活動

本校には、29の体育系クラブと同好会、22の文化系クラブと同好会があります。

	体育系		文化系
クラブ	硬式野球　バスケットボール 女子バスケットボール バレーボール　女子バレーボール 剣道　空手道　柔道　卓球 陸上　少林寺流空手道　弓道 サッカー　水泳　バドミントン ソフトテニス　ワンダーフォーゲル テニス　合気道　ハンドボール 極真空手　自転車競技　少林拳	クラブ	写真　吹奏楽　文芸　英語 美術　軽音楽　エコラン 野生動物研究　映画研究 origin　メカトロニクス研究 電子・情報・システム研究
同好会	トレーニング　体操　ゴルフ フットサル　ダンス ストリートバスケットボール	同好会	ピアノ　天文気象 イラスト・CG　建築 情報処理研究会 航空技術研究　演技 環境創造物理研究 将棋・囲碁　電験同好会

⑨クラブ活動

専攻科修了後の進路

H24年度

修了生数　38 名

就職者数 23 名（60.5％）

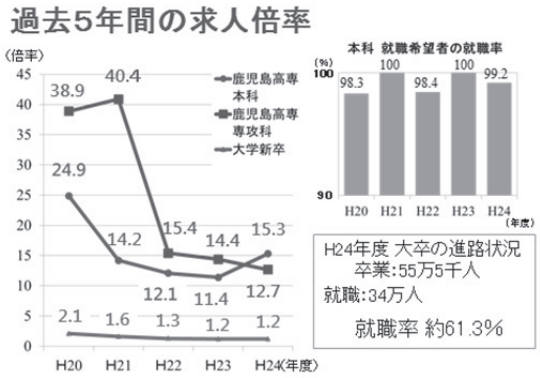
求人倍率：12.7 倍

本田技研工業・ニコン・安川電機
京セラコミュニケーションシステム
富士通・旭化成・富士電機
安川コントロール・ハイパーソフト
鈴建建設・日特建設
西日本高速道路エンジニアリング
九建・東京水道サービス　等

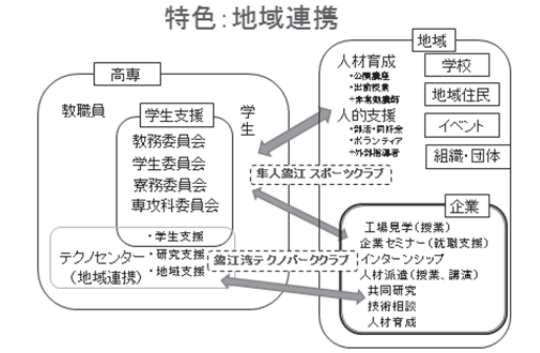
進学者数 15 名（39.5％）
主な進学先：国立大学大学院

大学院進学先（過去5年間）	進学数
九州大学 大学院	12
九州工業大学 大学院	16
東京大学 大学院	3
名古屋大学 大学院	2
北陸先端科学技術大学院 大学	2
長岡技術科学大学 大学院	1
豊橋技術科学大学 大学院	3
東北大学 大学院	1
大阪大学 大学院	2
鹿児島大学 大学院	2
神戸情報大学院 大学	1
奈良先端科学技術大学院 大学	2

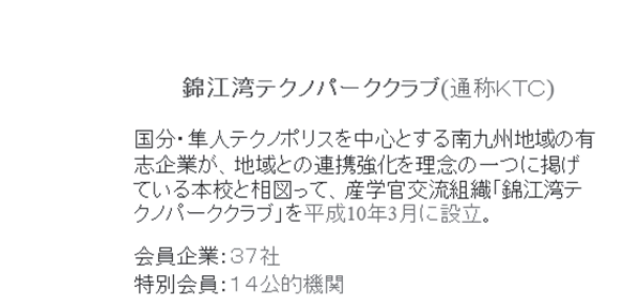
⑫専攻科修了後の進路（平成 24 年度）



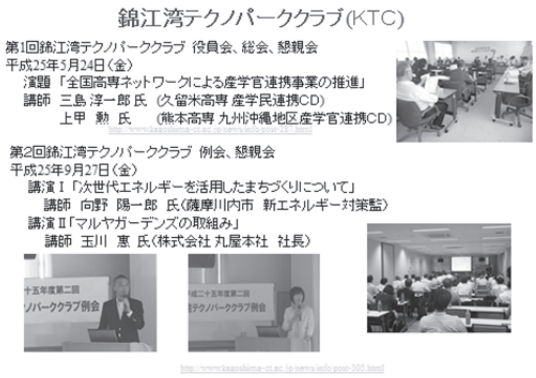
⑬過去 5 年間の求人倍率



⑭本校の地域連携（産学官連携含む）

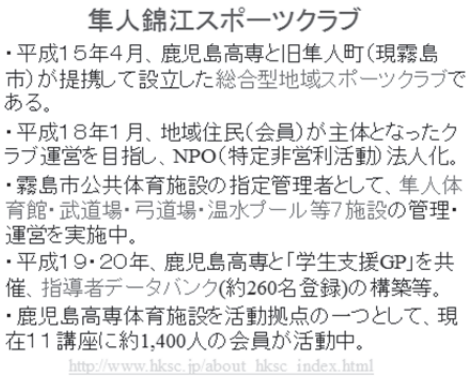


⑮産学官連携組織（KTC）の概要



⑯産学官連携組織（KTC）の活動Ⅰ

⑰産学官連携組織（KTC）の活動Ⅱ



⑱地域連携組織（隼人錦江スポーツクラブ）

特色：九州沖縄地区高専の国際交流連携事業

＜高専・アジア・企業連携による実践的・創造的技術者の養成＞

1)目的

- 実践的・創造的技術者の育成
- グローバル技術者の育成

2)概要

- 鹿児島高専を主幹校として九州・沖縄地区の9高専が連携し、海外・国内でのインターンシップ、海外研修、専攻科の単位互換等を推進する。
- 1高専の学生数は本科が800人～1,500人、専攻科が40～150名程度であるが、連携によるスケールメリットを発揮する。
- インターンシップでは、約900の会員企業を有する 九州経済連合会（ステークホルダ）と連携する。
- 国際交流、海外研修では、アジア諸国の高等教育機関と9高専の交流実績、及び高専機構が締結してきたMOUを活用し、アジア諸国との関係を強化する。
- 専攻科の教育プログラムを見直し、単位互換、長期インターンシップ、長期海外研修を行いやすくすると共に、専攻科への秋入学の導入により、海外からの研修生、留学生の受け入れを推進する。

⑲国際交流連携事業（9 高専連携事業）

シンガポールでの学生交流
ニーアン・ポリテクニク

日時：2013年9月15日(日) ～ 9月21日(土)

スケジュール：

9月15日(日)	12:20	鹿児島発 台北経由シンガポール着 20:45
16日(月)	終日	シンガポール異文化理解研修
17日(火)	10:00	三井ハイテック工場見学
	13:30	マキノフライス工場見学
18日(水)	10:00	ニーアンポリテクへ移動
	13:00	ニーアンポリテクの学生と交流（初日）
19日(水)	11:00	ニーアンポリテクの学生と市内散策（2日目）
20日(木)	10:25	シンガポール発 台北着 15:10
21日(土)	午前	台北市内異文化理解研修
	14:00	台北発 宮崎着 17:00 高専着 20:00

⑳9 高専連携事業での活動Ⅰ

㉑9 高専連携事業での活動Ⅱ

インターンシップ推進部会

1）タイにおけるインターンシップ

①**MK**ウォータテック

期間：**2013**年**8**月**14**日～**9**月**10**日（**4**週間）

人数：**2**名

実習内容：工業用排水の浄化処理

②**SIAM DIWA INTERNATIONAL**

期間：**2013**年**8**月**14**日～**9**月**10**日（**4**週間）

人数：**2**名

実習内容：工業用排水の浄化処理

㉒9 高専連携事業での活動Ⅲ

タイにおけるインターンシップ

MKウォーターテックでのインターンシップの様子

SIAM DIWA INTERNATINALでのインターンシップの様子

㉓9 高専連携事業での活動Ⅳ

鹿児島工業高等専門学校
創立50周年

- 鹿児島高専は，本年，創立50周年（昭和38年4月創立）
- 平成25年11月1日に鹿児島高専の体育館を会場として，約1500名の来賓や在校生・教職員の臨席のもと記念式典を開催
- 記念式典後，「この50年，これからの50年」をテーマにデザインを募集し，最優秀賞に選ばれた都市環境デザイン工学科4年佐藤結希さんのデザインをもとに同窓生と学生が協力して作成したモニュメントの除幕式

㉔創立 50 周年記念事業

～平成25年度自己点検・評価報告書の説明～

【原田校長特別補佐（総務・企画担当）】

私の方から、「平成25年度自己点検・評価報告書」についてご説明をさせていただきます。

自己点検評価書は、「外部評価委員会資料」の７頁にございます。

これは、独立行政法人国立高等専門学校機構（以下、高専機構と言います。）が、中期目標を達成するために定めた高専機構の年度計画に対応する本校の計画と実績に対する自己点検・評価を行っております。

ここで、高専機構の中期目標についてご説明したいと思います。「外部評価委員会資料」の資料２をご覧ください。

独立行政法人国立高等専門学校機構の中期目標について説明してあります。

（資料２に基づき説明。）

まず、序文に独立行政法人通則法があります。その規定により高専機構が達成すべき業務運営に関する中期目標を定めるとあります。

その下に「全文」がありますが、要約させていただきますと「高専機構が独立行政法人を設置しまして、職業に必要な実践的かつ専門的な知識及び技術を有する創造的な人材を育成し、我が国の高等教育の水準の向上と均衡ある発展を図ることを目的とする」とあります。ですから、この目的のもと、産業界に創造力ある実践的技術者を継続的に送り出し、ものづくり基盤の確立に大きな役割を担い、専攻科においては、より高度な知識・素養を身につけた実践的技術者の育成を行っています。さらに、これまで蓄積してきた知的資産や技術的成果をもとに、技術相談や共同研究など、地域や産業界との連携の期待も高まっております。このように、高専にさまざまな役割が期待される中、15歳人口の急速な減少という状況の下で優れた入学者を確保するためには、５年一貫のゆとりのある教育環境や寮生活を含めた豊かな人間関係など、大学とは異なる高等教育機関としての高専固有の機能を充実、強化するため、高専機構の中期目標を以下のとおりとする」とあります。その１頁の一番下にそれらの目標として、ローマ数字のⅠ「中期目標の期間」がございます。２頁目をめくっていただいて、その一番上にローマ数字のⅡ「国民に対して提供するサービスとその他の業務の質の向上に関する事項」とあります。そして４頁の下の部分に、ローマ数字のⅢ「業務運営の効率化に関する事項」そして、次頁のⅣ「財務内容の改善に関する事項」の４つの目標になります。また、独立行政法人通則法の規定によりまして、高専機構の中期目標を達成するために中期計画を作成し、さらに中期計画を達成するために、年度計画を作成しなければなりません。ですから、これに応じて各高専は年度計画を作成し、高専機構に提出をいたします。そして、年度計画に対する実際の報告も高専機構に提出をいたします。

では、資料１の「自己点検・評価報告書」をめくっていただきたいと思います。そこで今回、皆様にお配りしました「自己点検・評価報告書」は、このような背景の下、高専機構に提出した年度計画と実績報告のうち、平成22年度から平成24年度までの先程の資料２のローマ数字Ⅱの「教育研究に関する」部分に焦点をあてまして、「国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置」をまとめたものです。

その内容の中核はその表紙にありますよう

に、「１教育に関する事項」（１）入学者の確保、（２）教育課程の編成等、（３）優れた教員の確保、（４）教育の質の向上及び改善のためのシステム、（５）学生支援・生活支援等、（６）教育環境の整備・活用、２研究に関する事項、３社会との連携、国際交流等に関する事項、４管理運営に関する事項」でございます。

そして、１ページめくったＡ３の資料１が具体的な自己点検・評価報告書になります。資料１の説明を行いますと、左から順に「高専機構の年度計画」それと「それに対応または関係する年度計画と実績報告」と「自己評価」であり、平成22年度から24年度までをまとめたものであります。また、１番右端には、平成25年度の重要事項等の記述したものであります。

自己点検評価書の報告については、以上でございます。

【本間委員長】

ありがとうございました。では、現時点で質問しておきたい事項があればお伺いいたします。ございませんでしょうか。

それでは、この後のことにつきまして、今村総務課長よりご説明があります。

【今村総務課長】

この後の施設見学についてですが、授業の関係で経路が少し重複してしまいますが、風力発電設備、実習工場、電子デバイス実験室、寮の４カ所を見学いただきたいと思います。

～質疑応答～

【本間委員長】

それでは、議事を再開いたします。

先程、説明された事項、施設見学を受けまして、委員の方々からご質問、ご意見をいただきたいと思います。ご質問、ご意見を受けまして、鹿児島高専の方から回答をいただきます。最初は、委員一人当たり、１～２分程度でご質問をいただき、高専側の回答をいただき、計３～４分を目どに進行していきたいと考えております。

私は、最後に質問させていただきます。では、席順に髙田委員からお願いいたします。

【髙田委員】

素晴らしい施設を見学させていただきました。宿舎がとても良く整備されていること、また、建設中であったりして興味を持ちました。

私が一番聞きたいのは、外国人留学生はどういう状況なんだろう、ということです。学んでいく中で、支障はないのだろうか、例えば、日本に学ぶことはもう無くなったなどと言われるくらい日本の評価が下がってきているような印象を受けますが、留学生の日本に対する評価はどうなっているかお伺いしたいです。

【椎国際交流委員長】

本校に在籍しております留学生の状況から申し上げますと、現在、国費での留学生が４人在籍しております。国別で申し上げますと、インドネシアから１名、セネガルから１名、モンゴルから２名、計４名在籍しております。このうちモンゴルからの１名は、女子学生です。過去10年くらいの実績を見ます

と、大体４～７名の留学生が本校に来ております。そのうちの２名が本年度本科を卒業しますけれど、どちらも大学に進学をいたします。本校に来た留学生のほとんどが本校を卒業した後に、日本国内の大学に進学するという状況でございます。昨年度に限って言えば、たまたま１名が是非現場で働きたい、ということで、国内のメーカーに卒業して就職した事例もございますが、ほとんどは、大学に進学するという状況です。それから、留学生からみた日本で教育を受ける意義というかモチベーションというのは直接調べたことはないのですが、本人達の状況、また話していく上での雰囲気を見ると、日本に来てよかったと日本に来て勉強する価値はある、と感じてくれているという風に私自身は受け取っております。それから、留学生に対する支援としまして、九州地区内の各高専に来ております留学生を一堂に会して研修会などもありますし、また、今週末は本校独自で日本文化研修旅行ということで、沖縄に連れて行って日本文化に触れる機会をつくったり、そのようなことで各種の留学生に対する支援を行っております。また、今後、できるだけ留学生が増えていくようにそういった活動をして行きたいとは思っています。

【肥田委員】

施設見学させていただきました。実際中に入ってみると、広いなと感じました。中学校の立場から本校の生徒のことについてなのですが、高専を受けたいという生徒に志望動機を聞いてみますと、「ものづくりの経験が出来る」とか、「パソコンのプログラミングを知りたい」など話しております。そういったことで、本日、具体的な場所を見学させていただいて、あのような専門的なものに学生が触れる。それが学生のモチベーションの向上につながるのではないか、と改めて思いました。３Ｄプリンター等、テレビでは見ることがありますが、実際のプリンターを見たのは、初めてでございました。

要望的な話になりますが、今年度の８月22日と29日に、高専で教職員を対象にした研修会を開催してくださいました。隼人中も近いので、出来るだけたくさんの参加をしたかったのですが、学校の行事と日程がうまく合わずに、せっかく御案内をいただいたのですが、一人しか参加することができませんでした。機会を与えていただいたのに、たくさんの先生が参加できなかったことが、申し訳なかったです。複数の日程を用意してくださったこともありがたかったですし、今後もこのような研修を是非続けていただければありがたいなと思います。

【芝副校長】

本年度は初めての研修ということで、霧島市教育委員会を窓口として、霧島市の中学校教員を受け入れました。１日だけですと、なかなか厳しいものですが、最初４日間という日程で予定をしていたのですけれど、本校の事情等がございまして、最終的には２日間ということで実施いたしました。今後とも研修に関しましては、教育委員会を窓口として、対応して参りたいと思いますので、またそのような機会がありましたら、先生方にもたくさん参加していただきたいですし、今後継続的に実施できたらいいと思っております。

【中西委員】

私も校内に入ったのは初めてで、素晴らしい教育環境にあるな、と思いました。私の方から、２点質問させてください。１点目は、

学生を地域別に見ますと、鹿児島市がおよそ３分の１在籍しているようです。また、姶良地区が３分の１ですね。学生獲得のことにも関連してくるのですが、中学校では各高校や高専などの進路先をお呼びして学校説明会を開催しております。ところが、平成24年度から呼ばれなくなった、という学校が出たのではないかと思います。原因は、中学校の教育課程が変わりまして、授業時数の確保のために、それまで結構な時間を割いていた学校説明会の時間を減らしました。本校も実は、一昨年まではお越しいただいていたのですが、昨年度からは、近隣の学校だけに絞って開催いたしました。こういった状況の中で、鹿児島市内には約40校中学校がございますが、平成25年度、どのくらいの中学校の高校説明会に直接出向いて説明されたのかお聞きしたいと思います。

２点目は、寮生活のことなんですが、このご時世の中、１年生が全て寮で生活をしていることは、非常に稀なケースだと思うのですが、他の高専と比較されて、どのくらいの高専が、１年生の全寮制を義務づけていらっしゃるのか、ということと、寮生活を通じて、学生や学校において、メリット、デメリットや課題をお聞かせいただければと思います。

【芝副校長】

１点目に関しましては、私の方から説明させていただきます。２点目につきましては、寮務主事にお願いしたと思います。

１点目の高校説明会ですが、県内には約250校の中学校がございますが、そのうちの約190校に「個別訪問」など実施しております。どれくらいの中学校から依頼されて説明会を行っているかという数字は明確ではないのですが、お呼びいただいた学校は、当然説明会を行っております。ただ、どのくらい中学校から依頼があって、そのうち説明会に参加した、というデータがありませんので、正確にはお答えできませんが、後ほど回答させていただきたいと思い余す。

（追記）平成25年度は、89校の中学校から説明会の依頼があり、全中学校に訪問しています。ちなみに平成24年度は72校でした。

【堤寮務主事】

正確には把握してないところですけれども、全国で500名を超える寮生がある高専は51高専中３校と聞いております。本校と和歌山そして沼津です。知られてはおりませんが、この３校が全寮制となります。九州では、佐世保が全寮制と謳っておりますけれども、自宅から通える人は、免除するらしいので、うちのように隼人町内に自宅があっても１年の間は寮に入ってください。というようなことは佐世保はしていないと聞いています。

寮生活のメリットですが、集団の中で生活する、ということでお互いに気を使って生活をする、といったところだと思います。たとえていいますと、本校の学生が卒業して、就職先でルームシェアをしなければならなくなったそうですが、ルームシェアをしても何のストレスも感じない、と話しておりました。そういう部分で精神的にタフになるのかな、と感じております。

デメリットですけれども、今、先生方の話題にも上がっているとは思いますけれど「発達障害」といった問題が出てきておりまして、それの対応に苦しむところであります。どうしてもなじめない学生は、自宅通学も許可しておりますし、何とか耐えられる学生は、最大限ケアをしながら、見守りながら生活しているところです。当然、スタッフの方

もそういった研修会に参加しておりますが、まだまだこれから勉強が必要だと感じております。

【永吉委員】

私は、何回か訪問させていただいておりますが、寮まで見せていただいたのは初めてで、非常に敷地が広いな、と思いました。

高専を機関としての評価をしていらっしゃって、さらに自己評価までされていて、非常に素晴らしい取り組みだと思います。赤坂先生がお話されていたように例年何かしらの評価を受けてらっしゃるということで、大変だろうなと思いました。

その中で、３点ほど伺いたいのですが、１点目は授業評価のことです。具体的な評価の方法やその評価を受けて、どのように改善されたのかをお伺いしたいと思います。授業評価を実行されている点は非常に素晴らしいと思いますが、資料から詳しいことが分かりかねましたので、教えていただければと思います。２点目は評価ということで、当然数値目標を挙げていただいて、目標が明確になっていいのですが、ただ、この数値設定の根拠が不透明だと感じました。数値を公表するために設定しておられると思うのですが、これらの数字は当然、達成の困難度によって違うと思うのですが、優しいものもあれば、ハードルが高いものもあると思います。目標達成の困難度が明確にされておらず、目標数値の設定の根拠が不明だと思いました、どのようにして数値を設定されたのかお伺いしたいです。３点目ですが、私どもの工業技術センターは、個別の研究ごとの評価はしております。事前評価、中間評価、事後評価をしております。ただ、高専のように組織、機関としての評価も必要だと思います。そこで、今回評価をすることで、どのように受け止め、改善していかれるのか、今回の評価を今後どういうふうにつなげられるのか、ということを教えていただければ有り難いです。

【井手ＦＤ委員長】

授業評価の内容についてですが、年に２回行っております。学期末試験時期などに学生に対して、数値での評価と自由記述にしています。どうしても数値のみになると、評価しきれないところがでてきますので、自由記述も取り入れております。数値ですが、一例ですけれども「教員が興味を引き出す工夫をしているか」「教員の話し方・板書は適切だったか」「授業の進み具合は適切か」など、８項目あります。それらを５段階で評価をします。集計結果は受けている授業単位で集計して、平均を出しております。それを基にしてＦＤ委員会などで参考にさせていただいております。もちろん校長にも報告しております。これについての改善ですが、各教員に集計結果をフィードバックし、その後改善計画書を出してもらいます。改善計画書はその次の評価の時に、どのように改善をしたか、などの報告をしてもらうようにしています。以上です。

【赤坂校長】

数値設定の根拠がよく分からない、ということですが、計画を立てる側としては、数値を設定すると数値に縛られるので設定には慎重になります。現状より少し高めに設定したり、他の高専の状況を見ながら、本校に見合った数字を設定したりしています。学校に見合った数値を設定することで、学校として過度の負担がかからないように、学校としてアクティビティーが上がるように考慮しなが

らケースバイケースで設定しています。それから「研究活動の評価」ですが、教員には研究に関する実績の評価を報告して貰っています。研究論文がどのくらいあるのか、外部資金をいくら獲得したかなどを報告して貰って、その結果を教員の業務評価などに使っています。高専は「高等教育機関」で、大学は教育研究が役割になりますが、高専の主たる役割は「教育」です。ただし、教育を高めていくために、社会の状況を見ながら研究もやるという位置づけなので、教育水準を維持するために研究を行い評価につなげています。以上です。

【宮村委員】

私の方からは、質問が１点と意見が２点あります。まず質問ですが、高専の学生は３割程度が卒業後、大学へ編入するという話しを聞くのですが、ひとつ懸念しているのは、高専が大学進学への予備校化としているのではないか、という点です。実際にそういう話しが聞こえてきます。そこで、鹿児島高専は全国的なレベルに対してどの程度の位置にあるのか、ということをお尋ねします。

意見の１点目です。地元との連携に関してです。これは、一部の方にも申し上げていることなのですが、「錦江湾テクノパーククラブ」。私も会長をしていたので、評価される側にいるのですが、なかなか成果が出ずに、この５年間苦しんで参りました。どうも高専側と民間側の間に壁がある。敷居が高い、そう感じるんですよね。それを何とか打破しようと、いろんな政策を校長先生ともお話ししながら、やってきたんですが、もっとこれを進めていけば、共同研究開発、それから先程実験室で話しもあったのですが、運用費用ですね、例えば、民間の企業から研究費を出してもらえるとか、そういうことも可能ではないかな、と思うわけです。そうすることで、先生方がどんどん外に目を向けて欲しいな、と思います。

それから、２点目ですが、評価に関することなんですが、組織の評価、人事の評価などいろいろありますけれども、この資料を事前にいただいて拝見させていただいたのですが、ひとつは目標値が定かじゃないんですね、目標値が定かじゃないのに、実績が出てそれを評価をする、ということが理解できません。客観性がまるでないと思います。そこでやはり、評価の基準をはっきりする、数値目標の根拠をはっきりさせ、さらに客観性を持って評価する、ということを組織の評価、人事の評価に取り入れて欲しいな、と思います。以上、３点です。

【芝副校長】

本校は、３割が進学、７割が就職となっておりますが、都心部の高専はもっと進学率が高いところもありまして、100％大学進学する高専もあるようです。予備校化している、というご指摘もありますが、そういう見方もあるのかなと思います。それから、全国的なレベルで、本校がどの位置にいるのか、というのは、校長先生からお話しいただければと思います。

【赤坂校長】

本科を卒業して進学を選択する学生が現在30％程いるということですが、これは宮村さんがおっしゃったとおりです。全国高専の平均をみると40％程ということなので、本校は本科を卒業して就職をする学生が多いと言えます。それから、高専が大学の予備校化しているのではないかというお話ですが、そう

いった学校も確かにあります。進学する学生が７割、極端なケースでは９割の学生が進学する学校もあります。普通の公立高校と比較しても、高専の就学率の方が高く、一流大学に多くの学生を進学させている高専もあります。ですが、本校はそうではありません。もともと５年間教育で、早く社会に出て行く、という高専設置の原点を比較的きちんと受け継いでいる学校です。もう少し進学率が高くてもいいかなとは思います。

研究成果について「もの足らない」ということですが、確かに、そうかもしれません。高専全体の業務の中に、研究をどう位置づけるかは大変難しい問題です。高専が社会的に非常に高い評価を得ているのは、高専が実践している「社会に貢献できる技術者を育てる」という教育であって、これをしっかりと維持する必要があります。高専が大切にしているのは人材育成教育です。ご指摘いただいたご意見の中に、科研費の応募率が60％でいいのかとあります。目標値が低すぎるのではないか、というご意見もございます。しかし、私は大学と高専は違うと思っています。高専の良さをしっかりと維持していくためにどうするか、全体的な業務に研究をどう位置づけるかということです。それにしてももう少し出来るのではないか、というご意見はあると思います。そのあたりは何とかしないといけないのですが、なかなか難しいところです。企業との共同研究は年間10件ほどです。件数も少ないし、金額もそんなに多くはない、年間一千万円もいかないくらいの金額です。そのような実態ですが、教員は学生の人材育成教育、社会貢献の他、学内委員会などの業務分担もあります。それらのバランスを考えながら、研究の位置づけを考えなければなりません。

評価の仕方が不明確で、目標値が明確に定められていないのではないかというご意見ですが、これに関しては、毎年全教員に自己点検票と自己評価書というものを出して貰っています。どういった項目を設けているかというと、主に４つに分けられています。１つめは「教育学生指導」、２つめはＦＤ活動、研修等、３つめは研究、産学連携、受賞、資格取得、４つめは管理運営、社会貢献です。それらを細目にわけて全部で33項目を設けています。これで全てのアクティビティが網羅されているかというと特殊な業績は評価できない可能性がある。それらは、教員に自由記述して申告してもらうようにしています。それらを基に点数化し、総合評価します。それから企業と高等教育機関との一番の相違点は何かと申しますと、高等教育機関の教員は、何をするかを自分で決めることが出来るという特徴があります。高等教育機関とは、それぞれが分担しなければならないことは担当しながら、自分がやりたい分野に集中することが基本的に認められる組織だと思っています。会社であれば、会社が社員に仕事の割り振りをします。高等教育機関はそうではありません。教員個々の発想を尊重するという基本で成り立っており、それを崩してはいけないと思っています。教員が一生懸命取り組み、教員の集合体としての高専が様々な分野で成果を上げるのが理想です。そのような考えに沿った評価を行っているのが現状です。以上です。

【中島委員】

他の委員の皆さんと重複してしまうのですが、私も数値目標の根拠を知りたかったのですが、校長先生がおっしゃいましたように、本当は設けたくないんだ、ということで、数

値化してしまうと当然それを達成しなければならなくなりますから、大変だ、と言うことだと思うのですけど、ただ、例えばですけど、女子学生の在籍率に15％を掲げてあって、現実的には半分以上達成しているようです。50周年記念の素晴らしいモニュメントが正門前に設置してありますけれども、佐藤結希さんがデザインしたものですが、昨年、たまたま彼女を別の取材でお会いしました。隼人工業の生徒さんと高専の佐藤さん含め学生達が、共同制作というかたちで、隼人の建築資材会社の社長さんが、場所を提供して住宅の５分の１の模型を作製する、ということに佐藤さんが参加されていて、私がたまたま取材のカバーで行ったら、佐藤さんもいらして、少しお話をしましたら、とても「ものづくり」に対する情熱を感じまして、改めて素晴らしい学生さんはいるなと感じました。それで、女子学生数15％と掲げてありますが、報告書を見ますと、もちろん昔よりはトイレの改修など、改善されている部分も多々あるかと思いますが、女子学生が生活する環境としてはまだまだだな、と感じますので、こういった環境も含めて、15％と掲げているのであれば、佐藤さんのように素晴らしい女子学生がいらっしゃると思いますので、頑張っていただければと思います。

先程、ご意見に出たのですが、我々報道機関の方にも高専が予備校化している、という話しは報道機関でも聞こえてきております。一方では、編入とか就職とか選択肢が多いのも１つの強みかな、という見方も出来ると思うところです。それから、50周年記念式典の際に赤坂校長が述べられていたことで、私もなるほどな、と思ったんですが、これから50年、資源のない日本の中で、エネルギーも原発をどうしようか、稼働しようかという非常に資源のない国で、人材が日本の資源ということなんですけれども、その中で、英語力、グローバル化ということで、コミュニケーション能力をどうするのか、どう求められるのか、ということを校長先生が式典の時におっしゃっていたのですが、報告書を見ますと、外国人講師を雇う予算が通らなかった、とあるようですが、これは仕方のないことだと思います。立ちはだかるものがありますから、仕方のないことです。英語力能力の向上というのは、なかなか難しいところなんですが、グローバル化に向けて、高専はどのように対応されているのか、お聞かせ願いたいです。

【芝副校長】

ご意見ありがとうございます。女子学生は15％達成にむけて、努力していきたいと思います。それから、選択肢が多い、というご意見ですが、我々もそのように思っています。宣伝と言ったら変ですが、高専の魅力を伝える時に、大学へも行ける、就職も出来る、という風に案内をしております。これは、高専において魅力なところではないかな、思います。それからご質問の英語力の向上、グローバル化ということにつきましては、校長より回答させていただきます。

【赤坂校長】

女子学生の15％という数字ですが、今本校は10％くらいです。1,000人の学生に対して100人くらいということです。「土木工学科」を「都市環境デザイン工学科」と変更したことで、女子学生が増えてきました。佐藤さんは都市環境デザイン工学科の女子学生の一人です。高専は全国に51あるのですが、学校によって学科の編成が違っています。本校は機

械系、電気電子系、制御系、情報系、建設系があります。学科によって女子学生数が違いますが、似たような学科構成の学校の女子学生数に比べると本校はかなり少ないです。そこで15％に上げようという目標を設定して、それに向けて女子学生を増やそうとしています。いろんな事をやっておりまして、例えば女子学生向けのパンフレットを作ったりしています。中学校の学校説明会の際も「鹿児島高専は男子校ではありません」ということをアピールしたりしています。

次に、グローバル化やコミュニケーションに関して、具体的にどうするか、ということですが、今一番やろうとしているのは、ASEANとか東南アジアの国々の学校と協定を結んで、学生の交流の機会を増やそうという取り組みです。おそらく一番効果があるのは、学生を海外に放り出して、英語が出来なくて恥ずかしいとかつまらない思いをすることではないかと思います。反面、一緒に海外に行く学生の中には相当出来る学生もいるわけです。それがきっかけとなって自分で英語を勉強しよう、という学生が増えます。授業だけではダメで、自分なりに学ぶしかないのです。学生のモチベーションを高めるのは、海外に出ることと、海外の学生を受け入れて交流の機会を増やすことです。そのためには、アジアには安全で教育水準が高い国が多いから相手国としてはいいです。ネイティブではないので、多少英語がうまくなくてもちゃんと受け入れてくれる。国によってレベルが違いまして、香港やシンガポールは非常にうまいです。タイだと日本よりちょっとうまいくらいかなという感じです。いろんな国があって、それぞれのレベルで学生が付き合えるのかなと思います。高専は専攻科も併せると７年間もあります。初歩的なレベルでは集団で海外に行って、だんだん自信がついてくると一人で長期間海外に滞在して単位を取得したり共同研究したりすることもできます。いろんなプログラムを組んで、アジアの学校と協定を結んで、学生交流を推進していきたい、と考えています。もう一つは、教員にも変わってもらわなければならないと思っておりまして、外国人の教員に来てもらって授業をしてもらうのも勿論いいのですが、そうではなくて、本校の教員が英語で授業が出来るようにしていかなければならない。本校の教員は、実践教育は得意ですが、英語があまり得意でない方々が高専の教員になっていることが多いようです。教員が変わっていかなければならないと思います。高専機構も教員の英語力向上の研修などいろいろ始めています。そのような研修に出て行って、教員が自分の英語力をレベルアップしていくことも大切なことです。

【石窪委員】

私は、お伺いするのは初めてではないのですが、お伺いするたびに、様々な新しい施設が造られていて、中学校から入るのに対して、施設や技術面も含めて、大学と高校の中間というようなイメージですので、大変充実しているのではないかと思います。それから、評価に関しましても、高専の評価は、大学の評価に近く、中期目標等含めてかなり細分化されていて、そういう意味では、非常に良く取り組まれているのではないかと実感しています。そこで、貴校の特長を一般の方々にどのように伝えていくのかということが今後必要なことと思いました。少し感じたのは、パンフレット等を見た時に、教育理念などはしっかり書いてはあるのですが、目指すべきものといいますか、目標像が分かりづら

く、コンパクトな言葉で「高専をこのような学校にしたい」というものが見えてこなかったので、高専をアピールするわかりやすいキャッチフレーズのようなものがあればいいな、と思いました。あと３点ほど質問させてください。一つは、資料にも出てきていますように老朽化しているとあります図書館についてです。現状につきまして老朽化の問題、予算の配分の問題等の内容は拝見しましたけれど、特にこのような学校の中で授業を受ける場所と、それから寮との中間点として、図書館の役割はすごく大きいと思います。寮も拝見しましたが、ひとりの狭い空間でしかないのでもうちょっと図書館で本を読んだり、学習をしたりとか、広い空間で多面的にものを考えること等ができる場所、というのがすごく重要だと思うのですが、そういう施設が現状としてどうなっているのか、学生の利用状況も含めてお伺いしたい。また、今後図書館の使われ方を強化していただきたい、ということが一つです。それから２番目は、教育理念のなかでは、開発型の技術者の育成、それからアドミッションポリシーの中でもプレゼンテーション能力のある人、というふうにあり、大変重要だと思うのですが、評価報告書の中で見えてこなかったので、伺いたいことでもあります。やはり、外に向けての伝える力ですとか、それから企業に入りましても、コミュニケーションやプレゼン能力がすごく重要だと思いますが、理系の方であるからこそ、そのあたりの教科をどうなさっているのかお伺いしたいです。もう一点は、卒業生・修了生及び企業による学校評価アンケートを見た時に、満足度の下位は英語力と人文社会であったとのこと。英語力向上へ向けた取り組みにつきましては、先程の質問の中でご回答いただいたのですが、人文社会というものが満足度の下位の中にあり、劣っているといいますか、企業の担当者の評価も40％と出ておりますし、それから卒業生の中でも低評価としてでているので、それをどのように分析なさって、何が足りない、と感じてらっしゃるのか、また、それに向けてどのような取り組みをされているのか、といったところが気になりました。人としてのバランスていうのがすごく重要だと思うのですけれども、そういった中で、人文社会に対してのアプローチが必要なのではないかと感じました。

【芝副校長】

１点目は図書館についてということで、利用状況また本校の施設のマスタープラン的なものの位置づけということですが、前半に関しては、図書館長の方で回答いたします。マスタープランにつきましては、施設も絡みますので、説明が足りないものは校長より補足させていただきます。それから、２点目３点目につきましては、私の方から回答させていただきます。伝える力の方向、それから人文社会の科目のことになります。では、鮫島先生お願いいたします。

【鮫島図書館長】

まず、図書館の利用についてですが、一番近いデータで学生の月あたりの利用は800冊です。これを前年に比べると、月によって上下はあるのですが、あまり変わっていません。あと、他の学校のデータがないので、比較はできませんが、図書館の雰囲気については、おっしゃったとおり３つの要素があります。本を借りて読む場所、まさに図書館のことですね、２つめが今ＡＶ機器など色々なものを置いてありまして、そういったものを利用しながら、休憩する、休憩時間など休む要

素遊ぶ要素です、もう一つはやはりそこに行って、自分たちの本業であるレポートを調べながら書いている、そういった良い空間になっていると思います。一つ例を言いますと、うちの特色としては工業系の本が充実しておりますので、地域の方にコアなファンがおられまして、そういった方は霧島市の図書館からこちらに廻されまして、借りに来られるんです。そういった方々がうちの学生とのちょっとした出会いの場にもなっていると思います。ですから、工業系の中にあって、いろんな要素をミックスして、私自身も一般文系ですが、文系的な要素がある一番象徴的な場所で、アゴラになっているような気がします。マスタープラン及び施設のことについては、校長先生もイメージはされているのですが、その実行の直前に予算の壁がありまして、現状では、誇りを持ってアゴラになっている、ということを申し上げたいと思います。それから３番目の一般文系ですので、人文科学系に対する評価についての基準がよく分からないのですが、はっきり言いまして、教官としては苦戦しています。時間数が足りません。それはもう致し方ありません。が、その中で、一番注意していることは、人文社会に関して言いますと、社会に対する窓です。寮におりますと、世間の事が分からないケースがあります。私は歴史を教えていますが、今何が起こっているかをどうやったら理解させられるか、このニュースをどう読み解けるか、そういう逆から入った講義をしていますので、シラバスに基づきながらいろんなものを取り込んでいます。社会に関して言うと、歴史と、哲学・倫理の教官、政経もおります。それから、全てを一度に一人の教官では出来ませんので、５年間ワンセットで連携してやるカリキュラム、シラバスを組んでいるつもりであります。残念ながら地理と日本史については非常勤の先生に来てもらっていますが、可能なかぎり連携して社会に対する窓であり、得てして寮のような閉鎖的な空間になってしまわないように、また、工業系はピカイチですので、われわれ教員としては、そこに負けないように自負を持ってやっているつもりでございます。

【赤坂校長】

その前に、目指すべきものがよくわからない、という点がありましたので、それについて少し補足しますが、資料４があります。学校要覧です。その中で３頁から４頁にかけてですが、「Ⅳ　学習・教育到達目標」がございます。そこの１項で「人類の未来と自然との共存をデザインする技術者」２に「グローバルに活躍する技術者」３「創造力豊かな開発型技術者」４「相手の立場に立ってものを考える技術者」４点があります。これが、各教室に貼ってあります。これが学習・教育到達目標です。毎年新入生が入ってきますが、４月に１年生の研修を大隅青少年自然の家で行っているのですが、そのとき私が行って話しをするときは必ず学修・教育到達目標について話します。もし学生が停学処分になったりする時は、必ずこれを校長室で読ませます。この４点を、様々な機会に学生に周知するようにしています。

図書館に関してですが、図書館長からはアゴラ的に開放されている、という話がありました。私としては図書館施設を改善しないといけないと思っています。本校の図書館は２階建ての独立した建物で１階は図書館として使っていますが、２階には教員室が９室入っており、一般の教室も入っています。先程、都市環境デザイン工学科棟の改修現場を見て

いただきましたが、この改修に合わせて一部増築が認められました。補正予算のお陰です。この増築によって図書館２階の教員室を移転することが可能になりました。そこで、できるだけ早い時点で改善計画を立て、２階は今のような中廊下ではなく、広々とした機能的な図書館にしたい。図書館の改修は施設改善の大きな課題です。経費は掛かりますけれども、是非実現したいと思っております。

【芝副校長】

１番目の質問、３番目の質問につきましては、鮫島図書館長と校長に回答していただきましたので、２番目の伝える力、プレゼンテーション力の件は私からお答えさせていただきます。コミュニケーション能力も当然入ると思いますが、本校の場合には、PBL という科目の一貫としても力をいれているところであります。いろいろなものを作ったり、それをまとめて発表する、という時間を必ず設けています。それから、どこかにインターンシップに行った時も、報告会ということでまとめてプレゼンする場を必ず設けています。それと、卒業研究の時には各人が皆の前で発表する、という機会を設けております。学科によっては、１年の時から PBL 的な教科の中でそういう場を設けて、実施するようにしております。あと、人文社会系の件ですが、鮫島先生から回答していただいたのですが、高専でもやはりそのようなことが問題になっておりまして、高専間の議題にも上がります。英語教育もそうですけれども。一般系の科目をどうするか、ということです。これは大学生と比べる時に必ず出てくる事です。やはり時間数が工学系のほうが多い、というものがあります。さきほどいったように、寮生活で割と狭い空間で生活しているので、なかなか大学生ほど幅広いつきあいが出来ない、ということも当然原因だとは思いますけれども、それは、限られた時間の中で解決するように我々も、本科だけでは無くて、全校学生の中でも色々とアイディアを出しながら少しずつでも改良していこうということで、現在取り組んでいるところです。

【相良委員】

卒業生として評価委員会に参加させていただきましてありがとうございます。意見というよりも感謝を申し上げたい。創立50周年を迎え、この50年間で教育設備が大変充実した事を感じています。例えば図書館、創立当時は全く無かったので、中に入ると、すごいなと思いました。これからはもっともっと充実しなければならないという学校の考えは分かります。それでも、ずいぶん揃っているなと思いました。これからが楽しみです。今回、初めて半導体のところを見させていただいたのですが、鹿児島高専の中にあのような施設があることに、希望をもらいました。先生達は文科省のいいなりというわけではなく、自由に自分の考えで仕事をしていいんだ、という校長先生のお話にもあったように、自由性があるようですので、テクノパーク周辺の大手企業の技術、セラミック、特殊半導体や、真空に関する技術等、鹿児島高専にしか出来ないような独自性のある授業をして欲しいと思います。それから高専の学生は、社会性が乏しいとか言われます。それは、特徴だと思うんです。私達卒業生が県内の会合に出たりすると、高専卒業生はよく似ている、と言われます。真面目だけれども、自分の意見を曲げない。とても頑固だと、その特徴は、高専生活の中で、自然に身についたものだろうと思います。それはそれで、特色では無いかな

と思います。確かに、社会性が不足していることは認めます。それから先のことは社会的な事を勉強すればいいと思います。昨年、50周年記念モニュメントをデザインした都市環境デザイン４年生の佐藤さんと一緒にモニュメントを作らせていただいたのですが、非常に感心しました。最初、彼女の書いてきた図面だとこのままだと出来ないな･･･と思ったのですが、問題点を指摘したら、10日くらいで徹底して書きなおしてきました。それを基に50周年記念モニュメントの製作が進みました。「都市環境デザイン」の教育内容を、よく知らなかったで、彼女が図面を引き直して来た時は「おもしろいな、なかなかやるな。」と思いました。ある意味で、今回の交流のように学生と卒業生が一緒に、目標を目指すような交流があれば学生は別の伸び方をするのではないかと思います。学校ＰＲの件ですが、そもそも「高専」という言葉そのものがなかなか理解してもらえない、社会的には大学があって、短大があって、高校があって、専門学校があって、専門的な学校があって、あとは小中学校がある、だから一般社会にとって「高専」という言葉はなかなか理解しがたいだろうと思います。「高等専門学校」というと「専門学校」としか理解されていないんですね。そこの違いを高専に入ってくる中学生にどういったかたちで「高専」と他の学校との違いを理解させるかだと思います。そこで、鹿児島高専のファンの中学校をつくっていくことが大切なんじゃないかなと思います。卒業生なので、学校が嫌いなわけがないし、評価も良い方向に評価しがちです。私達がいた頃よりすべての点で良くなっていっています。いろんなことを踏まえて本当に良い学校だなと思います。

それから英語教育ですが、我々の年代は65歳を過ぎて、退職者が出てきています。その方々の中には外国に行ってスーパーバイザーをしたり、いろんな国で工場の立ち上げを経験した方々がたくさんいるんです。そういった経験をまじえながら、英語を教えられる先輩達がいると思います。その方々を先生にして、実質的な教育をしていったらどうでしょう。どんどん先輩方を活用していったらいいような気がします。

【芝副校長】

いろいろと高専を誉めてくださいまして、ありがとうございました。１点だけですね「高専を世の中にどう理解させるか」というのがあったのですが、これは永遠の課題で、いろんなところで取り上げられる問題です。この間テレビでロボコンの放送がNHKであったんですが、あれは高専を伝える意味でいいPRに役立ったと思います。それからNHKのスペシャル番組で高専を卒業して、きちんと就職している、という高専の普通の姿を取り上げてもらったと聞いたのですが、全国放送で流れると非常に影響力が強いと思います。我々ももちろん努力しなければならないんです。それから、中学校の方にファンを増やすということですが、我々は中学校訪問を同じ学校に年２回は訪問しております。それに高専に親子、親戚同士で入学していただいている例も多いところを見ると、大人が子どもに「高専はいい」と宣伝してくれていると思っているので、それは非常に力強いと感じております。どちらにしても「高専」を世の中に理解させるということは今後も努力していかなければならないと、思っています。それから英語授業のOBの件についても検討したいと思います。

【赤坂校長】

鹿児島高専でなければ出来ない授業をする、ということですが、事前に学校から出した資料の中には、コア・カリキュラムというのがあって、それは鹿児島高専の授業の質を維持するためのコアという意味で、それ以外に各高専の特色は何かも問われています。各学校が工夫して自分のところの特色を打ち出すことも求められており、工夫していかなくてはいけないと思っています。それから、名称の問題ですが、これは高専が出来る前から続いている課題です。発足当初は「高等専門学校」の他「専科大学」という名称も検討されました。時を経ながら、専科大学という名称は出たり消えたりしています。PR の問題は各学校の問題でもありますが、高専機構の問題でもあります。PR には力もいれているつもりですが、何しろ学校の規模が大変小さいので埋もれてしまいがちです。これもずっと言われている課題です。それから OB の皆さんに色々協力してもらうということですが、これもそのとおりだと思います。

【本間委員長】

私は大学目線で、反省を込めて質問したいと思います。工学というものはピークが色々と変わってきます。だから、新しい技術を取り入れる為には研究は非常に重要だと思っています。その意味で,今回施設を見せていただいた時に、補正予算が取れた、ということですが、おそらく高専が先の未来を見据えて、こういう施設を入れたら良いということで予算請求された結果だと思います。ただ、せっかく入れた施設をうまく利用するには、研究をしなければいけないと思います。というのは、研究すれば少しの期間でも学生に手伝わせることになり、学生のレベルが上がると思います。その意味で研究の重要さ、それから研究内容を「研究総覧」や「データベース」を年で更新して公開することによって、外部からの相談を受注することができる、と考えるのですが、その研究データベースの更新がされていない、というのが気になりました。それから、校長先生が「高専の先生は自分の発想で研究できるんだ」ということをおっしゃいましたが、そしたらそれは科研の話しに繋がるだろうということなんですね。ですから、全体的にレベルアップするためには、研究の情報公開等をして予算を持ってくるという思索がもう少し見えてこないかな、と感じました。それについて質問したいです。もう一つは、50年経って、これから10年、50年先の鹿児島高専のことを考えれば、予算の話もあるとは思いますが、キャンパスマスタープランとのリンクがあると思うんです。先程図書館の話しもされていましたけれども、そういう大きな流れというものが、報告書に書かれていなかったので、どう考えているのかというのもご説明していただければと思います。

【芝副校長】

１点目の研究に関することと、キャンパスマスタープランという大きな話しになりますので、校長にお願いします。

【赤坂校長】

自分の発想で研究ができるというのはもちろんですけれど、私がお伝えしたかったのは、色々な職務があって多面にわたっている中で、どういうところに力を注ぐかに各教員の主体性があってよいという意味です。これは研究に限ったことだけでは無くて、学生指導をしたい教員とか、教育に力をいれたい教

員とか、研究で特色を出そうとか、色々な教員がいて構わないということです。校長があれをしなさい、という強要はしないということです。

データベースの更新をしていないということは問題です。更新するように指導はしているのですが、だんだん良くなってきてはいるものの、更新に時間がかかっているということです。ではどうするかというと、先程の自己点検・評価報告書の項目の中に入れています。研究総覧のデータベースを更新していなければ評価点を与えないということです。個別に更新が無いことを注意することもできるのですがそこまでやっていません。

科研費のことですが、おそらく本間先生は科研の申請率が60％であることに不満をもってらっしゃると思います。目標値がなぜ100％ではなく60％なのかといいますと、以前までは申請率の実績が大体40％くらいでした。それで他の学校に話を聞きました。申請率は学校によって違います。年度計画の中に申請率の数字を入れている学校がどのくらいあるのかは把握をしていないのですが、本校は数値目標を60％に設定して年度計画に入れました。この数値の根拠は、聞いた他の学校の数値と比べ、少し高めの数字を設定したということです。設定して４年くらいになりますが、ずっと達成できていませんでした。それで今年度は教員集会で全員応募ということを伝え、やっと70％超えたのです。申請書にはテーマ見ただけでこれでは採択は難しいだろうというようなものもあります。学校の方針といわれてなんとか書き上げたという申請書もあります。問題は申請率より採択数ですが、申請しなければ採択はありえないわけで、やはり申請率の数値目標を設定していかなければならないと思っております。さっきの繰り返しにはなりますが、全体の位置づけがあります。特に宮村さんには産学連携を推進する仕事をやっていただいていたので、研究分野の話が多くなりますが、高専はそれが全てではありません。弱い面を強くいいすぎると、気付かない良い面が失われることもありえます。そういった点にも注意しなければならない。その中でどのように設定するかということを考えています。私も元々大学にいましたので、はじめは申請率がなぜ100％ではないのか、100％にできるはずだと校長に就いたばかりの頃は思っていましたが、高専と大学は違います。高専のアクテビティが低いのかというとそうではなくて、大学とは違ういい面もたくさん持っています。良い面をしっかり維持していく。それもやっていかないと社会から評価されている高専の良い面が失われるということも考えられます。そのへんは平行線かもしれません。校長が変われば別の方針を出すかもしれませんが、私はそう思っています。

キャンパスマスタープランですが、施設マネジメント委員会があって、そこに校長が諮問して答申をもらうかたちでやっています。一番最近のマスタープランは今年度出しました。高専機構が毎年施設白書を出していますが、その中にはマスタープランの見直し時期が記載しており、本校は今年度の更新となっています。補正予算の関係で、ずっと要求し続けてきた増床が実現したため、マスタープランの見直しが可能になったということです。補正予算のお陰で増床が可能になって、図書館の２階の教員室を移動させ図書館の改修が可能となりました。教員室が移動になって、同じ学科であっても分散していた教員室を集約することができるようになりました。それらを最新のマスタープランに反映させま

した。

～追加～

【宮村委員】

いろいろ皆さんの意見を聞いてきました。大学と高専の違いだったり、校長先生の意向も伺いました。それから目指すべきビジョンがなかなか見えないという話しもあり、いろんな話しがありましたが、いえば、鹿児島高専の独自性の問題で、独自性をどう考えるかという問題だと思います。つまり、鹿児島高専のオリジナリティをどこに出していくか、そういう観点で錦江湾テクノパーククラブの会長として最後に一つだけ意見を申し上げたいのは、やっぱり地域との連携を重視してほしいな、ということです。もちろん学力もあるしいろんなこともあるんでしょうけれど、地域の連携というのは必要だと思います。その中でいわば人材育成というのが育まれてくる部分もあると思いますし、いろんな良さがあると思うので、地域連携を進めて欲しいな、と思います。今、冒頭に説明がありました隼人錦江スポーツクラブとか錦江湾テクノパーククラブそれからベンチャーの隼人テクノ、高専祭、ロボコン、いろんな特徴があると思うんです。こういうのを地域との連携を考えながら、是非推進をして欲しいな、と最後に申し上げます。

７．外部評価委員会講評及び本校の対応

【外部評価委員会講評】

①鹿児島高専としての一つの方向性を示して欲しい

（各先生が重点を置く項目を選択し、教育と研究活動を勧めていることは、よいことである。しかし、地域に根ざす鹿児島高専の特色を強く打ち出すためには、赤坂校長の下に、一つの方向性を示した活動が今まで以上に必要であるとの意見が多く出された。）

【本校の対応】

教育面に関して、本校は４つの学習・教育到達目標を定めている。これらを集約し、本校が今後最も取り組むべき教育の目標を一言で表せば、「グローバル・コミュニケーション能力を備えた創造的技術者の育成」である。

本校はこれまで、実践的技術者の育成において高い実績を上げてきた。実践力とは「与えられた課題を分析し、技術力を結集して解決策をまとめ上げる能力」である。高専ロボコン、高専体育大会等での高い実績は、本校学生のこの能力の高さを示す一例である。実践から創造が生まれることも多いが、創造力とは「与えられたテーマを分析し解決策を提案するにとどまらず、テーマの設定から技術的解決法の提案に至る一連のプロセスに深く係ることができる能力」で、実践力とは基本的に異なる能力であり、実践力に加えて創造力を育む教育方法の工夫が必要である。

グローバル・コミュニケーション能力の育成は、日本の教育が取り組まなければならない喫緊の命題であり、鹿児島高専にとって、「グローバル・コミュニケーション能力を備えた創造的技術者の育成」に向け、どのような教育を行わなければならないかを具体的に整理し実践することは、今まさに取り組まなければならない最重要課題である。

研究面への本校の取組はまだまだ改善の余地が多い。科学研究費は全ての研究者が応募できる研究助成金で、その応募率は組織の研究力の基本的目安となる。本校は第２期中期計画期間中（平成21年度～25年度）の科学研究費への応募率の目標を60％に設定してきたが、50％を下回る応募率が続き、低迷していた。そのため、平成26年度に関しては原則全員応募を掲げて取組み、初めて70％を超えた。しかし、応募の内容をみると未熟なレベルのものも見られる。高専機構は、「第３期中期計画期間内に全高専の応募率を80％以上とする」を第３期中期計画に掲げることを検討中であり、本校としては更なる研究提案能力の向上が必要である。

平成24年度から校長裁量経費の中にプロジェクト研究の枠を設け、個別研究だけでなく、学内でプロジェクトチームを構成して組織的に取り組む研究を育成してきた。プロジェクトの提案例は「小水力・太陽光、温泉利用発電」、「シラスを原材料とする多目的透水舗装材、混合セメントの開発」、「焼酎粕利用・きのこ栽培に起源する一連の研究」、「無線利用による病院内位置情報取得」、「環境気象情報ネットワークの構築」等であり、多くが地域に立脚する開発型研究を取り上げており、今後の進展が期待される。このように、教員・技術職員が分野横断的グループを編成して取り組んでいるプロジェクト型・開発型研究の中から、本校を特徴づけるような地域立脚型研究が次々に生まれることが期待される。学内に限らず、他高専、両技科大との連携や海外協定

校等との国際共同研究を推進する環境も整ってきつつある。プロジェクト研究、開発型研究への取り組みは、教員による授業内容、卒業研究、特別研究のレベルアップにつながり、実践的・創造的教育を向上させるという観点からも必要である。

以上の点を全教職員に周知し、学校として取り組んでいきたい。

【外部評価委員会講評】

②マーケッティング調査実施の後、鹿児島高専の特色の上手な広報を御願いする。

（鹿児島高専の進学者の地域分布を見ると、高専周辺の地域出身者が比較的多い。周辺地域に高く評価されている結果と考える。その評価を他地域に広め、優秀な入学者を増やす努力の不足を感じるとの意見が出された。私学高校では、判りやすい入学案内が作成され、広報に使用されている。鹿児島高専（高専機構）からの資料は、中学生にとって、判りやすいとは言えない。私学の資料と比べても難しく感じる。特色ある鹿児島高専を活性化させるために、継続的な入学者確保の活動を御願いしたい。）

【本校の対応】

本校が広報に使用している資料は、本校独自で作成したものとして（a)学校要覧、(b)小冊子（中学生のみなさんへ)、(c)小冊子（鹿児島高専－世界を支える技術者として－)、(d)今年度新規作成の小冊子（高専女子百科 Jr.鹿児島高専版）がある。また、高専機構が作成したものとして（e)小冊子（キラキラ高専ガール)、(f)高専女子百科がある。

(a)は本校の教育・研究、産学連携および地域貢献等の内容をまとめた全般的な内容で、主に企業向けの広報誌である。(b)、(c)が中学生・保護者向けの入学案内であり、(c)は（b)のダイジェスト版である。(d)は今年度新たに作成した女子中学生を対象とした入学案内である。これは、(e)、(f)が高専機構全体の内容であり、鹿児島高専の女子学生の内容が含まれていないため、鹿児島高専版として作成したものである。

本校は後期中等教育の高校と比較して、中学卒業後５年間で大学レベルの高等教育を行うために、特色である専門教育の内容を中学生に判りやすいように伝えようと、専門用語は避けて編集を行うように配慮をしてきたところである。しかし、前述の（b)、(c)の小冊子の内容が中学生にとって判りやすいとは言えないが、それにもかかわらず高専周辺地区の出身者が比較的多い周辺地域に高く評価されているということは、口コミなどで高専の魅力が周辺には伝わるが、その他の地域には現在の広報活動では充分には伝わっていないとのご指摘には真摯に耳を傾けなければならない。

中学生に判りにくい表現や中学生が何を知りたいかを、周辺の中学校や本校の新１年生に本校の特色や魅力についてのマーケッティング調査を実施後、編集方針を見直すことになるが、写真の撮り方や配置などは私学高校が作成した入学案内に学ぶことは多いと考えている。

受験倍率が平成25年度入学生から２倍を切り1.7倍であったのが、平成26年度入学生についてはさらに下がり1.6倍となった。これから益々効果的な入学者確保の活動に努めなければならない。

しかし、これまでの学生募集は、どちらかと言えば男子学生に重きを置いて行ってきたが、少子化によりこれ以上男子学生の受験者数を増やすことは容易ではない。国際数学・理科教育調査（TIMSS 2007）によれば、中学２年生の理数分野での学力は男女で差がないことが報告されているので、女子中学生にも積極的な募集活動を行わなければならないと考えている。

前述の（d)（高専女子百科 Jr. 鹿児島高専版）は、女子学生をスタッフに加えて女性教員と一緒になって作成した女子中学生向けの入学案内で、これまでとは違い学生の視点を取り入れた小冊子になっている。前述の改善点と共に、従来の広報誌の編集方針を見直さなければならないと考えている。

これにより、平成25年度実績で離島を含む鹿児島県下239の中学校のうち173校を本校教員全員で分担している個別訪問や、塾関係者への説明会や、中学生と保護者や中学教諭への地区別説明会において使用する資料がより判りやすいものになり、効果的な入学者確保に繋がるものと考えている。

以上の点を踏まえて、学校として取り組んでいきたい。

8．自己点検・評価報告書に対する【優れた点】、及び【改善を要する点または意見】に対する回答

同様の内容のものについては、まとめて記載している。また、外部評価委員会で回答した項目は除外している。

評価項目：1　教育に関する事項（1）入学者の確保

【優れた点】

①少子化傾向下での志願者数維持の取り組みを行っている。

・中学校訪問数や一日体験入学者の確保

・わかりやすいパンフレット（A４判・３つ折り）の作成

・中学校だけではなく学習塾や県外（福岡地区）での PR 活動等の積極的な広報活動

・全国組織というスケールメリットを生かしたロボコンなどの各種イベントの開催など積極的な PR 活動の取り組み

②卒業後の進路先を明示していることと、就職率が高い。

③入学後の基礎学力（英語・数学）定着のための補講を実施している。

【改善を要する点または意見と回答】

①資料各項目に具体的な数値が示されているので、確かな方針や分析がなされていることと思いますが、示された資料だけでは判りませんので、質問を兼ねて記載します（細かいことも含めますが）。

⑴学校説明会やイベント情報等の随時新聞掲載の形式・内容はどのようなものでしょうか。記事としての掲載ならよりインパクトある広報になると思いますが、具体的な情報が示されていないのが残念です。

（回答）南日本新聞では、みなみのカレンダーでの事前案内、事前インタビューあるいは当日取材等での記事掲載あるいはキャンパスプレスによる学校紹介等である。テレビやラジオでは、事前インタビューあるいは当日取材等でのニュース番組や案内コーナーでの紹介である。特に、MBC では、紹介番組（てげてげ等）での教員の活動の紹介や、MBC 主催行事に関係して、教職員及び学生の一言コメントの映像を流してもらっている。

⑵中学校訪問170校程度と決めた基準が明確になっていないので、この数が妥当であるのかどうか判りません。

（回答）鹿児島県の離島を含めて242校の中学校があるが、在学者数は940名から１名までである。その中で在学者数が50名以上の中学校数は170校程度であり、それらの学校を訪問することを考えている。

⑶一日体験入学者はどのように広報し募集したのでしょうか。500名程度とは高専の受け入れ許容人数なのでしょうか。

（回答）一日体験入学の時期になるとPRのために中学校を訪問し広報している。500名程度とは実績であり、基本的には一日体験入学希望者はすべて受け入れる方針で行っている。

⑷学習塾に対する広報活動実施効果が示されていません。中学生の受験に繋がっているのかの情報提示が欲しいと感じました。

（回答）定量的なデータはないが、説明会時の反応を見ると効果があると思われる。

⑸一日体験入学の約半分が受験したとの記載がありますが、中学生と保護者を対象にした入試説明会の参加者に対する受験率はいかがでしょうか。

（回答）平成25年度実績で入試説明会の参加者数が57名で、その内受験した人数は27名で受験率は約47％であった。

⑹福岡地区合同入試説明会参加時のブース来訪者の人数、受験者数の情報記載がありません。県内を対象とするならば、合同入試説明会への参加は必要なのでしょうか。

（回答）九州地区の高専をPRする目的で行っている事業に鹿児島高専も参加して行っている。現在のところ、福岡地区からの受験者はいない。

⑺混合クラスの問題点とそれに対する改善、その上での長短考慮したコアカリキュラムへの移行についての検討はされたのでしょうか。また、混合クラスに記載されている問題点は実施する前に把握できなかったのでしょうか。コアカリキュラム導入に伴う、従来のカリキュラムとの整合性とCPとの対応は取れているのでしょうか。

（回答）習熟度別のクラス編成では、中位レベル以下のクラスのモチベーションの維持が難しいことが実施して判明した。これは成績面にも表れている。そこで、コアカリキュラムへの移行の検討を行い、その中でコア科目の達成度評価において中位レベル以下の成績レベルの底上げを行う。従来のカリキュラムとの整合性については一部とれていないが、年次進行で実施することにより整合性が取れる。CP（カリキュラムポリシー）との対応は取れている。

⑻入試倍率に伴う、H22年度実施の取り組みを踏まえ、H23年度以降の実施がなされていない（記載がないので）がなぜでしょうか。H25年度の受験倍率低下原因に繋がっているのではないでしょうか。

（回答）記載漏れである。中学校個別訪問、地区別説明会、塾説明会を継続的に実施している。受験倍率向上のために、今後、さらに新たな試みの検討が必要と考えている。

②女子学生の比率向上に向けて、女子中学生向けのパンフレットの作成や、従来の広報誌に掲載されている写真に女子学生が写っているものを積極的に使用すべきである。

（回答）外部評価委員会開催時は作成途中であったが、女子中学生向けのパンフレット「高専女子百科 Jr.鹿児島高専版」が完成している。これを使って女子中学生の確保に努めたい。また、広報誌の写真にはバランスよく男女の写真を掲載したい。

③推薦入試方法の改善については、貴校が求める人材、たとえば、理科や技術の研究発表や制作で優れた実績を有する者の確保が図られるような工夫が必要である。

（回答）この点を踏まえて、推薦基準の検討を行いたい。

④常に受験してくれる中学校を増やす。

（回答）受験者数を増やすために、今まで受験者のいない中学校を含めて、県内の多くの中学校を個別訪問している。

⑤女子生徒が少ないのは設置学科や鹿児島の産業構造、そして地域の文化なども影響していると考えられる。原因分析が必要である。

（回答）高専の全国平均の女子の構成比は平成24年度のデータで約17％である。学科別に見ると、情報系、化学・生物系、建設系、商船系、および経営系のある学校ほど女子の構成比が高くなっている。本校と同じ系統の学科があるのは、木更津高専と松江高専があるが、木更津高専が14.8％、松江高専が15.2％、本校が9.8％であるため、当面の目標15％と考える。

同じ系統の学科がある高専よりも本校は女子学生が少ないので、その原因分析が必要である。

その一因として、女子中学生に対するPR不足であったことが挙げられる。本校の志願者倍率が、平成23年度が2.0倍、24年度が2.1倍と２倍を超えていたために、女子学生に対するPR不足であったことは否めない。しかし、平成25年度入試倍率が1.7倍、平成26年度入試が1.6倍と大きく２倍を切ったため、今後は男子学生に対するPRはもとより、女子学生に対するPRにもっと力を注がなくてはならない。

評価項目：１　教育に関する事項（２）教育課程の編成等

【優れた点】

①時代のニーズに即応した学科・専攻科の改組等に取り組んでいる。

②卒業生や卒業生の職場のアンケートを多く回収し、アンケートに基づいた分析を実施している。

③教育課程、シラバスがHP上で公開されており、特にシラバスについては具体的に書かれており、どのような授業が展開されているかわかりやすい。

④学生による授業評価とそれに対応した授業改善に取り組んでいる。

⑤英語教育強化の取り組みの必要性の認識ができている。

⑥インターンシップに全学的に取り組み、修了者に対して単位を認定している。

⑦全国高専ロボットコンテストやソフトテニス、サッカーの全国大会優勝などの実績を上げていることで、学生が高専での諸活動に自信と誇りを持って取り組んでいる。

⑧通学路清掃活動など新聞で報道され、地域おいて高専のイメージアップが図られている。

【改善を要する点または意見と回答】

①高専全体の教育理念とAPの記載はありますが、CPとDPの明確な記載が見当たりません。また、学科・専科毎のAP、CP、DPの記載がなく、気になりました。教育課程の編成は３ポリシーに基づくものと考えますが、鹿児島高専では必要ないと理解してよいのでしょうか。都市環境デザイン工学科は名称変更によるカリキュラムの見直しがなされているが、他の本科に

ついても名称変更をせず、ニーズに基づきCP、DPの変更が可能と考えます。記載内容からすると、現状のままで、必要ないと判断されたのでしょうか。

（回答）大学は当然のことながらDP、CP、APについて明確にすることが求められ、科目のナンバリングなども検討されているが、高専の場合はAPを明確にすることが求められている。DPとCPについては、明確にするところまでは整理されていない。また、APについても学校全体で決めているところが多く、本校も準学士課程と専攻科で決めている。DPとCPは明示していないが、内容的には「学習・教育到達目標（準学士課程）」、「学習・教育到達目標（専攻科）」がDPに相当し、「鹿児島工業高等専門学校における人材養成に関する目的その他教育上の目的」、「鹿児島工業高等専門学校専攻科における人材養成に関する目的その他教育上の目的」が各学科、各専攻のCPに相当する。今後、APとDPについて、学科、専攻ごとに明確にすることを検討したい。

都市環境デザイン工学科は名称変更によるカリキュラムの変更を行ったが、他学科は受験者数や就職進学状況から見て現時点では必要ないと考えている。

②目標達成度を評価する具体的な手順、例えば各学生のポートフォリオ等の作成（高専としてのフォーマットの存在）はされていないのでしょうか。報告内容から対応が読み取れなかったのが残念です。独自のチュータ制があるようですが、教員と学生との高専としてのアドバイザー制があると理解して良いのでしょうか。

（回答）専攻科、本科ともフォーマットがありポートフォリオを実施しているが、本科では十分ではない。今後、コアカリキュラムの導入にともなうルーブリックで充実していく予定である。

本校は担任制であり、担任がアドバイサーの役割を果たしている。さらに低学年で一部の学科で実施している。

③JABEEの求める、国際的に通用する技術者の育成には、私の理解によると、専門教育に関することを除き、５つのポイントがあると考えています。1）基礎教育、2）職業倫理、3）英語教育、4）エンジニアリング・デザイン教育、5）プレゼンテーション能力です。これらの教育に関する学生への取り組み、2）－5）に対する編成の具体的な記載がないのが気になりました。特に、履修可能単位数のスリム化が気になりました。スリム化による対策の具体的な明記がなく、従来の履修可能単位数との対応ができているのか心配です。従来が過密であった根拠が示されていないのも気になりました。

（回答）「2）－5）に対する編成の具体的な記載」は、本資料では行っていません。認証評価では求められた基準を満たしていることを示すために記載しています。

また、「履修可能単位数のスリム化」について、卒業に必要な単位数は、一般科目75単位、専門科目82単位を含んで167単位である。他高専に比べても一般科目の開講単位数が多いので、開講科目数の効率化（スリム化という表現）による単位数の削減（125単位から114単位）を行った。該当科目の非常勤講師数の削減も目的としている。これに伴い、一般科目の履修可能単位数は92単位から87単位になっている。平成26年

度の入学生から年次進行で実施予定である。

④学校要覧に掲載されている教育課程が科目一覧で終わっている感がある。本校がどのような教育展開をするのかといった視点で、第三者にも理解されやすい教育課程の全体計画（グランドデザイン）が必要ではないか。

（回答）各学生に配布する「学生便覧」には、教育課程表と教育課程の全体計画、すなわち学習・教育目標に対応した科目配置表が掲載されているので、学校要覧にもこれを追加する必要があるか検討したい。

⑤外国人留学生受け入れの増加や留学生を活用した英会話の訓練はできないか。

（回答）国費留学生のほかに短期留学生を受け入れている。

⑥災害ボランティアに対し、高専としての支援体制、あるいは単位化などの制度は必要ないのでしょうか。

（回答）現時点では特に考えていない。

評価項目：1　教育に関する事項　（3）優れた教員の確保

【優れた点】

①現在、高等教育機関で、女性教員・研究員の占める割合が問題になっているため、女性教員の積極的な登用に関連し、女性限定教員公募を続けて実施されていることは、よい人材の確保がなされたと判断している。

②教員の確保にあたっては、民間企業経験者の採用促進、外国人教員の採用の検討、他大学等との人事交流など、幅広い視点から検討・実施がなされている。

③霧島市教育委員会と連携して、他校種研修を実施している。

④教育、学校運営及び社会貢献に関して、特に顕著な功績を挙げたものを「教育功労者」として表彰している。

【改善を要する点または意見と回答】

①高専機構の学位等の取得率に関して指針内に収まったことの記載はありますが、多様な背景を持つ教員及びその割合も含め、鹿児島高専としての方針が示されていないのが残念です。女性教員の割合に関しても同様です。また、現在、高等教育機関で、女性教員・研究員の占める割合が問題になっているため、女性教員の積極的な登用に関連し、女性限定公募と採用審査には注意を要すると感じています。

（回答）高専機構が国立高専としての方針を定めており、現場としてそれを達成するようにしている。高専機構による女性教員の新規採用の数値目標は20％である。女性限定公募は、「雇用の分野における男女の均等な機会及び待遇の確保等に関する法律」に基づいたもので法的には問題はないため、高専機構が定めた方針である。国の男女共同参画の推進に協力するのは国立学校の役目と考えている。

②大学や県内工業高校などとの人事交流の検討をしてはどうか。

（回答）事務系職員では鹿児島大学、高専機構、九州内及び全国立学校と、教員では高専間、

技科大、海外協定校との相互研修（今後）があるが、工業高校との実績はない。業務内容が異なるため難しい。

③授業改善のスピードアップ化が必要である。

（回答）授業方法の工夫をスピーディに行うことは可能であるが、授業内容やカリキュラム改革には慎重さも大事と考えている。

④ HP 研究者総覧について、高専にはどのような教員の方々がいて、どのような研究をされているのかを検索するにはやや使い勝手が悪い。他大学等では、簡単に研究者・教員のプロフィールを検索できるシステムもある。

（回答）HP の改善は検討課題である。個々の高専だけではなく、高専機構全体の問題でもある。

⑤個性強き専門課程教育者の確保を望む。

（回答）魅力的な個性を持った教員かどうかは採用時の面接でかなりわかるが、採用後に磨かれる教員もいる。高専教員はまじめな技術者で、一般的にそのような個性を求めるのは難しい。大事なことは、熱意があり学生との交わりや面倒見を厭わないことである。そのような人であれば十分と考えている。

⑥ FD に関する項目で、教員相互の授業参観実態と利用実態の明記が必要だと思います。

（回答）授業参観のデータ、参観者のアドバイス等は FD 委員会でまとめている。教員は授業改善計画を FD 委員会に提出し、委員会は参観者のアドバイスと授業改善計画を校長に提出している。それらのデータは、教員面談や評価に活用している。

⑦授業評価アンケートの活用だけでなく、中間授業アンケートによる現状把握も必要と思いますがいかがでしょうか。

（回答）中間授業アンケートは行っていないが、クラス担任が毎朝の SHR、面談などにより学生の状況を把握している。全教員が出席する成績会議は中間と期末に開催し、担任が学生の学習・生活状況を報告したり、授業担当教員が授業態度を報告したりして、意見交換を行っている。

⑧高専の５年間を考えた時、一般の高校にあたる中等教育と大学にあたる高等教育が連続して行われることになる。特に中等教育に相当する時期においては、専門的な内容の教育もさることながら、学習意欲や将来への展望を持たせる教育も大切である。そこで、優れた教員の資質として、指導力やコミュニケーション能力を持った教員の確保も必要と考える。

（回答）高専は高校年齢の学生もいるので、指導力・コミュニケーション力は特に必要である。教員は公募により採用している。どのような教員を求めているかを募集要項に記載することが重要である。採用に当たっては、面接と模擬授業により、高専教員としての適性を最も重視して採否を決めている。面接、模擬授業には校長が必ず出席する。

⑨研究レベルも重要だが、ものづくりの楽しさを教えられる教員の確保も重要である。

（回答）色々な分野の教員を採用している。それぞれの公募要領に公募の趣旨を明記する。面接、模擬試験でこれまでやってきた内容、やりたいこと、適性等が大体わかる。ものづくりを実践するためには、施設、設備面の充実も重要と考えている。

⑩学生にかなり大きなインパクトを与える教員の確保が必要である。

（回答）教材の準備、教育内容、教え方と共に熱意も重要と考える。学生は教員の熱意を敏感に感じている。

評価項目：1　教育に関する事項　（4）教育の質の向上及び改善のためのシステム

【優れた点】

①クラブ活動の学外指導者の登用は、学生のモチベーションと技術力の向上によりクラブ活動の実績において、見るべき成果が上がっていると感じました。

②ものづくり等における成果報告会やOB技術者によるキャリア教育が実施されている。

③インターンシップを単位化し、インターンシップ受入企業の開発を行うなど、インターンシップ実施のための学内体制の充実が図られている。

④企業技術者や技術士会による講義は評価できる。

【改善を要する点または意見と回答】

①長期インターシップの参加割合の低さの原因とその改善策

（回答）専攻科における長期インターンシップの参加者を増やすためには、特別研究に関係した受け入れ先企業の開拓と学生の指導が基本と考えている。昨年度から開始した九州高専連携事業でも長期インターンシップの推進に取り組んでいるところであるが、九州地区の高専の共通課題として、上記に加えて数ヶ月間授業のない期間の確保や、宿泊先の手配等の課題を検討している。

②海外インターンシップのプログラムの構築と学生の意欲の喚起が必要である。

（回答）高専機構において、専攻科に進学する学生を対象にして、春休みの期間、海外インターンシップの募集を行っている。本校は学生に応募することを積極的に勧めており、過去数名が応募者の中から選考されて参加している。本校独自に、タイなどにある日系企業へのインターンシップを実施している。

③英語力評価の内部評価の割合を増やすことは良いと思うのですが、TOEICによる外部評価は、絶対的な学生の能力を測る上で必要と考えます。内部評価が良い学生は、必然的に外部評価もよくなるはずです。内部評価の確認にTOEICを利用すればよいのではないでしょうか。最近では、大学の卒業要件にTOEICを利用する、大学院入試にTOEICが使われるようになっています。

（回答）専攻科修了要件の1つとして、英語力の評価はTOEIC400点相当を必要としていたが、JABEEの審査において、外部評価に頼るのではなく内部で評価する自己完結型にするように指摘を受けたため、内部評価の割合を増やしている。また、高専機構は、専攻科の修了要件に外部評価を用いることを禁じている。

④JABEEのエンジニアリング・デザイン教育の対応について、触れられていませんが、高専全体としてどのように対応されるのでしょうか。

（回答）JABEEの認定を受けている本校の教育プログラム「環境創造工学」では、専門が異

なる学生の混合チームによるPBL形式の必修科目「環境創造工学プロジェクト」でエンジニア・デザイン教育を行っている。今年度は、自然エネルギーによる発電を主テーマとし、これを三チームに分けて太陽光発電、風力発電、小水力発電の三つの課題で実施した。

評価項目：1　教育に関する事項　（5）学生支援・生活支援等

【優れた点】

①学生・生活支援体制は、九州地区高専を取り込んだ鹿児島高専の積極的な取り組みを高く評価します。

②各種メンタルヘルス研修会に多くの教職員が参加している。また、「学生何でも相談室」を設置し、充実したスタッフの配置がなされるなど、今日的課題に対応しようとする支援体制が伺える。

③就職・進学情報に合わせて、企業情報及びＯＢ技術者による企業体験談などの講話で生の情報提供をされていること。

④学生寮の整備に取り組んでいる。

【改善を要する点または意見と回答】

①中学卒業時の分野選択は、多くの専門教育に入る４年次に移る段階で、モチベーションの持続を維持させる支援体制の状況を知りたいと感じました。多くの学生は問題ないのでしょうが、２～３割の学生、特に、留年生に対するケアは十分になされているのでしょうか。

（回答）１、２、４年生については、次学年に進級する前の１月に、キャリア教育を行っている。また、留年生に対しては、担任が中心となってケアをしている。

②多様化する学生ニーズへの対応は年々難しくなっていると思うが、相談しやすい体制づくり及び窓口、ツール等の充実、迅速な対応も求められる。

（回答）相談窓口に関しては、全学生に対して、学生なんでも相談室、担任、学生係、看護師、カウンセラー、クラブ活動の指導教員、ハラスメント相談員がある。高学年では、卒業研究や特別研究の指導教員等、相談しやすい体制との評価を高専機構の監事監査で受けている。ツールとしては、後援会の経済的援助を受けながら、適性検査（MSR-U等）、こころと体の健康検査（自殺予防）、hyper-QU等を実施している。

評価項目：1　教育に関する事項　（6）教育環境の整備・活用

【優れた点】

①専門施設は充実し、教育環境、施設・設備については、概ね良好と考える。特に、エアコンが整備されていることは、さすがに国立学校と思う。

【改善を要する点または意見と回答】

①50年を経過する中で、学生数や活動者数からみて、体育館の広さは狭すぎるのではないか。学

生と保護者まで入ることを考えた施設改修が望まれる。

（回答）体育館は２つある。その他、武道館、屋内プールがあり、体育施設は他高専と比べても相当充実している。技科大に進学した学生の不満の１つは技科大の体育館が狭いことと聞いている。

②ユニバーサルデザインの視点は、今後さらに重要になってくると考える。社会の動向を踏まえ、今後とも迅速・適切な対応を期待したい。

（回答）施設設備において障害者対応（バリアフリー）は常に考慮している。施設の転用性、外国人留学生への配慮（生活習慣の違い、特にイスラム教徒（食事、お祈りの場、ラマダン））等も必要である。

③ものつくりの加工施設は整ってきているが、それらのものを組み立てるスペースはいつまでも確保されていない。まとめる場所やテストする場所の確保がなければ学生の自由なモノ作りに対する情熱を伸ばせないのではないか。

（回答）その通りである。部品を製作する機器類、装置は相当充実しているが、それらを組み合わせ、物を作るスペースはほとんど確保できていない。他高専も同様である。学生は要素技術を学べるが、総合化したモノづくりは難しい。高専ロボコンのロボットは同窓会に寄付していただいた「夢工房はやと」で行っている。工作スペースを設ける予算を獲得するのは難しい。とはいっても、工作スペースを学内で確保するために他スペースを転用することは困難である。高専機構に働きかける必要があり、今後の検討課題である。

④高専の特性から、施設・設備の整備・充実は大きな課題であると考える。今後とも予算獲得を含め、計画的な教育環境の整備に努め、より充実した教育・研究が推進されることを期待したい。

（回答）整備の必要性の根拠を明確化し、高専機構との粘り強い折衝が基本である。平成24年度補正予算により平成25年度に増床が実現できたことで、従来のマスタープランを具体性のある平成25年度のマスタープランに更新することができた。

⑤整備計画は優先順位を決め、着実に進めていくことに加え、省エネ・省資源への取り組み等、学生が主体的に関わっていく機会、体制づくりも必要かと思う。

（回答）高専機構に毎年、管理的経費節減書を提出している。具体的には、電気、上下水道、ガス、コピー用紙、消耗品、印刷物、刊行物、通信費に分け、各年度の経費の実績と当該年の目標値を提出している。設備の高効率化、意識改善、メンテナンス、省エネパトロール、ポスター・メータの使用実績の啓発活動等も提出している。教育の一環ととらえ、学生にも指導している。

評価項目：２　研究に関する事項

【優れた点】

①外部に情報を積極的に発信する取り組みは評価できます。

②各種機会をとらえて研究発表を行ったり、企業等との連携を図ったりするなど、研究への積極

的な取組が見られる。
③外部資金獲得の積極的な取組みや実績は評価できる。

【改善を要する点または意見と回答】
①国内外の学会活動の情報がありません。研究に関する事項であれば、国内外の学会発表、委員会活動等の参加を積極的に促したらどうでしょうか。結果的に最新研究動向の把握ができ、それらの参加を契機に共同研究等に繋がると考えます。
（回答）教員は自己点検票と自己評価票を毎年校長に提出することになっている。その内容は大きく４つの大項目に分かれ、(1)教育・学生指導、(2)FD 活動、(3)研究・産学連携、受賞、資格取得、(4)管理運営・社会貢献である。さらに各項目は細項目に分かれ、全部で33項目である。細項目に含まれない場合は、項目を新設して自己申告できるようになっており、教員のアクティビティを広く評価できる仕組みになっている。国内外の学会発表、委員会活動等の参加については、(3)の項目で記載するようになっている。
②研究資金は少額でも企業等と共同研究して成果を出す実践的な研究が望ましい。
（回答）当然ながら成果は重要であるが、経費も必要である。学内の教員研究費は一人50万円程度である。装置のメンテナンス、部品交換、材料費、旅費、消耗品費等が必要になるために、学内予算では不足するので、研究経費はできるだけ外部から獲得するように推奨している。
③高専と企業との研究連携等が地域にも知らされると、また新たな人材確保や地域刺激にも繋がるのではないでしょうか。残念ながら高専での研究成果を知り得ていない。
（回答）地域共同テクノセンター広報誌に企業との連携状況（共同研究、受託研究、寄付金、科学研究費）を掲載している。教員の研究シーズは、シーズ集として同広報誌に掲載され、関係各所に配布している。また、この広報誌は電子化され、本校のホームページにアップしている。今後、地域への広報のために、「県民のための新技術セミナー」や「南九州発新技術説明会」などの会合で積極的にアナウンスしたい。
④地域特性や貴校らしさの出る研究、今日的課題解決型の研究等に着眼して頂きたい。
（回答）多くの教員は得意とする分野の研究を行っているが、地域特性や今日的課題解決型研究も視野に入れてシーズを膨らませるように、学内での教員集会などの機会をとらえてアナウンスしたい。また、「今日的課題」は企業からの技術相談からも得られるため、ホームページなどで相談しやすいような環境づくりに努めたい。

評価項目：３　社会との連携、国際交流等に関する事項
【優れた点】
①国際交流に関する事業は、必要以上の活発な活動となっており、高く評価できます。
・国際交流面での多くの取組は将来に期待が持てる。
・海外の大学や教育機関との学生交流や共同研究等が、広く検討・実施されるなど、国際交流

に積極的な取組が見られる。
・国外特に近隣アジアからの留学生受け入れや学校間の交流は活発に行われていることをさらに飛躍していただきたい。
・海外語学研修や外国人留学生受け入れの施設確保なども含め、国際交流が充実している。
②「高専ロボット」は全国的にアピールし定着してきたと感じる。
③「高専ロボットと音楽会」は地域からも絶大な評価がある。
④鹿児島高専発「県民のための新技術セミナー」の開催は大変評価できる取組である。
⑤小中学校を対象とした出前講座や霧島市立学校との連携による研修会等、子どもや教職員を対象とした研修会等により科学への関心を高める啓発活動への取組を評価したい。
⑥積極的に地域企業の人材育成や各種イベントの開催、海外との学生交流など実施している。
⑦外に向けての組織やNPO法人を通じての外部との交流は鹿児島県や霧島市の市民。企業との関係を密接にし、学校の評価を上げていくと思います。

【改善を要する点または意見と回答】
①海外の大学等との交流等に関する情報発信が不十分である。ＨＰや広報誌を活用したより一層の広報が望まれる。
・年度ごとの海外交流の学生実績、留学生数の実数等の数値情報の提示が欲しいと思いました。
（回答）国際交流活動の実績等を、今後HPや情報誌で積極的に発信していきたい。
②50周年にあたり同窓会の運営の在り方で反省しています。同窓会としては学生特に国際交流に関しもつと積極的に学校を支援すべきであり、今後、継続的に支援する方法を模索している。基金だけでなく年間に定額の国際基金への寄付を集めるシステム作りが必要なのではないか。
（回答）同窓会からのご支援が頂ければ大変ありがたい。国際交流基金への定期的な寄付については、他の高専や大学等の状況を調べるなど検討したい。
③社会との連携や国際交流等、積極的に取り組まれているように感じるが、さらに幅広く地域との連携や双方向の国際交流につながる取り組みを期待する。
（回答）文部科学省の補助事業である大学間連携事業に、24年度からの５カ年計画として本校が代表を務める「高専・企業・アジア連携による実践的・創造的技術者の養成」が採択されている。これは、九州沖縄地区の９高専が連携し、アジアの連携機関との交流を推進するものであり、連携機関との協定締結や交流プログラムの開発など順調に進んでいる。
④地域共同テクノセンター（整備機器等）の地域企業の利用実績状況が不詳であった。
（回答）センターの機器は、九州産業技術センターの開放機器データベースに登録しており、地域企業が活用できるようにしている。企業の利用状況は把握しているが、報告書には未掲載である。

評価項目：4　管理運営に関する事項

【優れた点】

①情報セキュリティ管理規程、推進規程、教職員規程、利用者規程が制定され、情報セキュリティ対策が計画的に進められている。

【改善を要する点または意見と回答】

①情報セキュリティについては、学生に対しても危機意識を常に持たせることが大切と思う。

（回答）各学科ともに、情報リテラシーの授業でネチケットなど、情報セキュリティに関する講義を行っている。また、今年度、本科１年生200名を対象とした「ネチケット講習会」を開催した。さらに、鹿児島県警のサイバー犯罪対策室から講師を招き、サイバー犯罪の概要や具体的な事例、特にソーシャルネットワークの利用に関連したサイバー犯罪とその対処法についての講演会を実施した。この取り組みは次年度以降も実施予定である。

②社会においては様々な危機管理の状況が発生していることから、起こりうる事件・事故を想定しての危機管理マニュアル等の作成及び見直しが必要である。

（回答）危機管理については学校全体で共通認識を持ち、その対応に当たることが重要であると考える。現行の危機管理マニュアルは、平成24年３月14日に高専機構が発行した危機管理マニュアル（暫定版）に基づき、本校の危機管理マニュアル（平成20年９月19日発行）を全面改訂し、平成25年４月１日に全113頁の暫定版として発行した。これには、危機管理体制の確立や事項別危機管理の要点等、起こりうる事件、事故、自然災害等がすべて網羅されており、現在、確定版の発行に向けて全学的にチェックをしているところである。

また、情報セキュリティに関する取り組みとして、現在高専機構から情報セキュリティインシデント発生時の連絡手段及び対応手順を整備・見直しするよう依頼があり検討中である。利用者向け情報セキュリティ実施手順（マニュアルやガイドライン）の整備・見直しについても同様に依頼があり検討中である。どちらも年度内に完了予定である。

③社会一般的に、職業モラルが低下している昨今、コンプライアンスに関する啓発や研修等は現状に満足することなく、多面的に強化して頂きたい。情報セキュリティ対策についても同様に、継続的に進化、強化していく必要がある。

（回答）コンプライアンスに関しては、高専機構が平成24年３月に作成した「コンプライアンス・マニュアル」を全教職員に配布し周知すると共に平成24年度から毎年11月に全教職員に対して「コンプライアンスに関するセルフチェックリスト」による自己点検を実施するなどしてコンプライアンス遵守を徹底しているところである。